女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾四號

當府内無郵税

一冊六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 164. June 1st, 1889.

第百六十四號目錄

EDITORIALS:—There are no Two Kinds of Morality.

LEADING ARTICLES:—Improvement of Food.

CRITICAL NOTES:—"Niphon-Kabun."

MISCELLANEOUS: — "The Woman's Magazine and its Kana." "Named Plume." "The World and Hope." "True Elysium." "The Ghosts appeal."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—Martin Luther.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

社説　道徳に二位なし

論説　食物改良論（津田仙、巖本善治）○柳と櫻（湯淺初子）

批評　日本韻文を祝す（不知庵主人）○女子必携○「お八重」の評拾遺（ふ、ち）

雜錄　女學雜誌の假名は亂暴なり○戯號○世と望み○紅蘭女史逸事○眞に樂しき處ろ○幽靈の哀訴○玉堂隨筆○茶話三

兒籃　乙女亞利斯（波月子）

史傳　宗教改革家

小説　酒鬼（藤庵主人）

寄書　法律上結婚者の年齢に付て（秋洲健二郎）○政府より功勞を表彰するに盃を用ゆるとを廢しては如何（匠眼法士）○歌十八首

開書　O. S. C. 君に答ふ（佐々城豐壽）

時事　皇后陛下御仁徳○慈惠醫院行啓○御誕辰祝日○近時最大の墓表○貴族的、壯士的○隅路橋上の杜鵑○女子會吏の創始

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The Bancho Itchi Church has just voted Mrs. Kumi Kure an elder and Mrs. Mine Takahara a deacon. The former, who is the first woman elected an elder, is the Matron of Meiji Jogakko; and the latter is the Principal of a School for Nurses.*

(2) *H. I. M. the Empress has just conferred the sum of 8446 yen 90 sen and 8 rin for the benefit of the "Benevolent Hospital." The amount is the result of her freewill economy during last year of the allowance for her wardrobe and private uses.*

(3) *According to the statistics of last year, there are 77 in the country, who are above 100 years old among women, while there are only 20 among men. Four reasons have been advanced in regard to the longevity of women over men: 1st. superior constitution, 2nd. less necessity for hard labour, 3rd. more temperate living, 4th. secluded life and consequent less exposure to danger.*

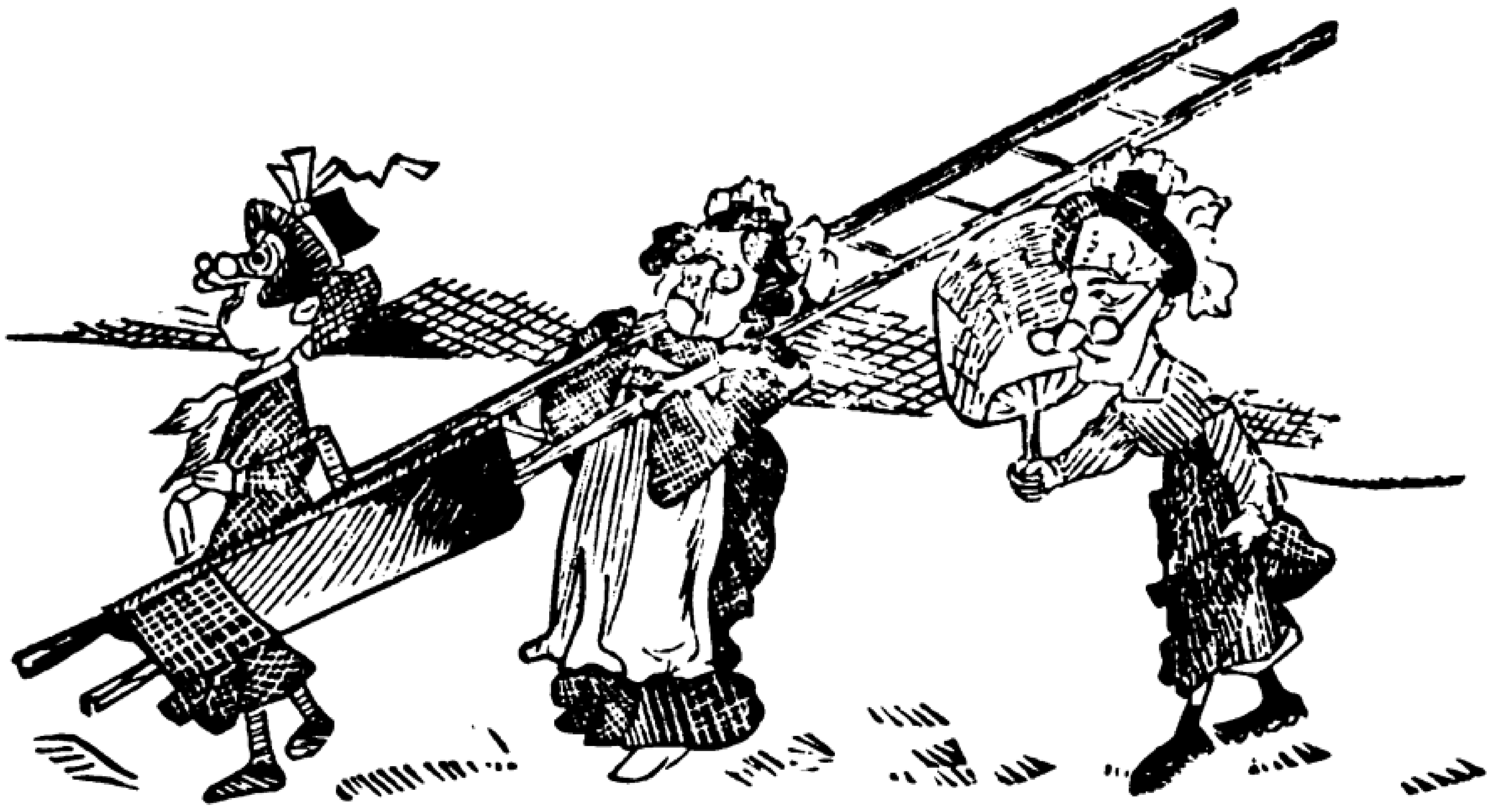
(4) *There are at present 11691 Protestant Christians among men, 9488 among women, and 2570 among children, total 24189 in the Empire.*

(5) *To-day, the fourteenth anniversary of the founding of Ferris Seminary, marks another era in the history of its progress. Invitations are out for the opening of Van Schaick Hall. Dedicatory services will be held this morning in the new chapel followed this afternoon by an entertainment given by the school. On Tuesday next the whole building will be thrown open to the public for inspection.*

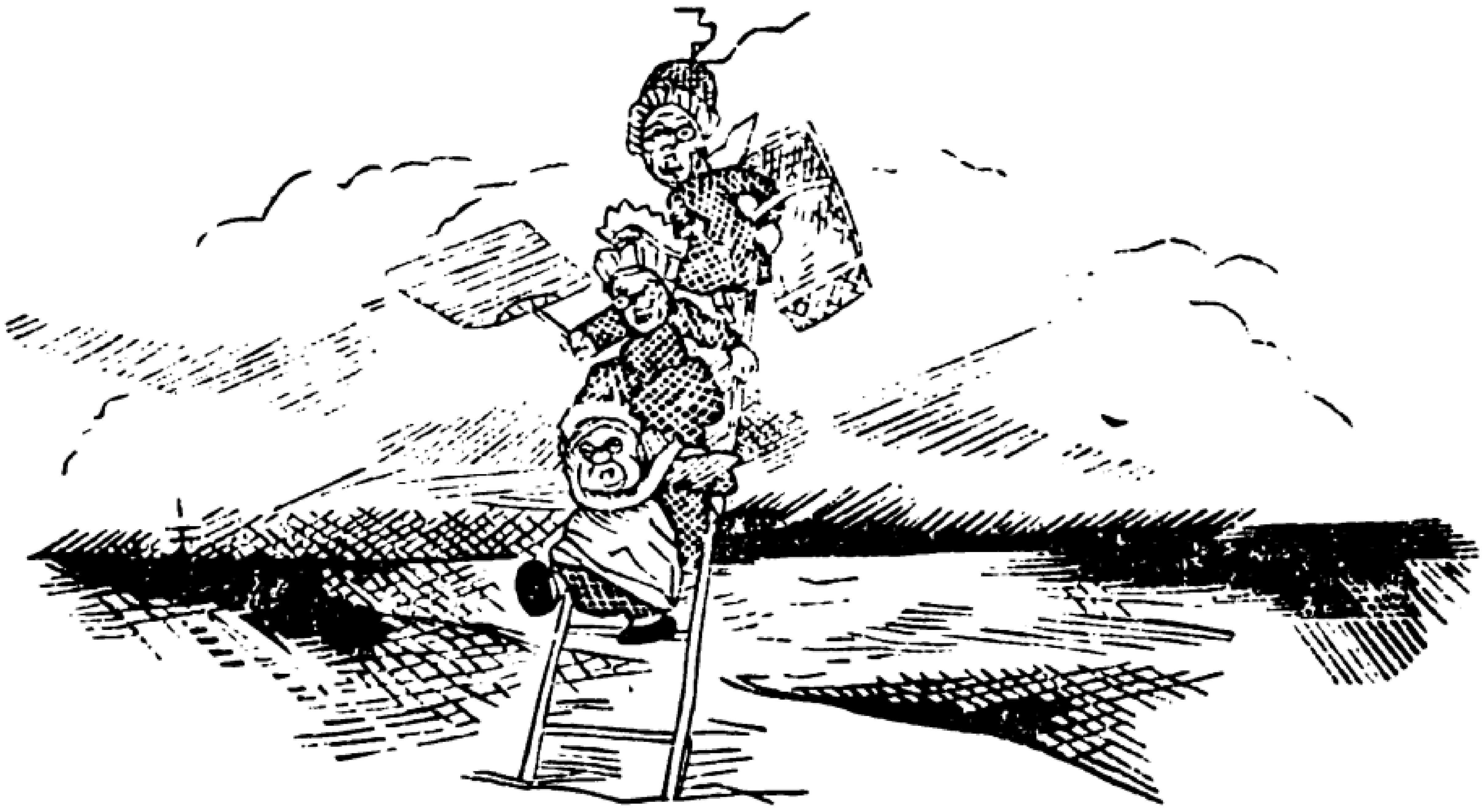
雜　女　誌　學

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

昔し或る賢こき女三人ありけり。果物を取らんとて出で行しが、一人は梯子を持ち、一人は籠を提げ、一人は日光を防がんとて大ひある團扇を持てり、賢こければ用意も至りて綿密にてありける。



扨て三人一度に梯子に登りけるに、其の傍ハらは廣ろき海なりければ兎角海の方に倒れんとして危うけれど、素と賢こければ如何なる手立かあらんと切りに工夫したりとあん。



左れどあわれむべし、一轉して楷子は虚空に飛び上り、人は横さまよ宙にかゝりける。

見る／＼楷子は落ちたり、左れど賢こき女は斯くあるらん、團扇持ちし人は直ちに帆となし、籠持ちしは他の一人と共にこぎ出せり。

女學雜誌 第百六十四號

明治二十二年六月一日發兌

社説

○道德に二位あし、

第一、人を論ず。

眞理を研究するハ喩へば巨船を御して大洋を横ぎるが如し、車輪の轉ずる所ろ歩々に暗礁なきや淺深幾何進路何如にと注意することを要すると共に、亦た屹立直立眼を放つて茫々たる天波を濶睨し、抑そも終極の彼岸の方向距離何如んなるやを遠望せざる可らず。故に眞理を研究するものは遠近二つ乍ら考ふべし、解剖的に惣合的に併せ考ふべし。

笑ふに堪へたるは彼の窮局せる學者なる哉、其の一草一木を微分し積分するは可なり然れども之と共に大天地の調和を達觀するを得ざる實に惜しむべき也、又彼は人の耳目鼻口を説明するを知る若くは人の道德を解剖し智力を分析し運動を類別するを知る、而して抑そも人を一個の人として惣觀することを知らず更に尤も惜しむべき也。吾人は理窟の甚だ面白き者たるを知れり、然れども理窟の未だ到着せざるに當りては別に之を直覺するの一理窟あることを知ざる可らず、人を論ずるに於ては尤も然り、人の道德を論ずるに於ては特に尤も然り。

スペンサーは數十年の研究を以て其の惣合哲學の八分を成就したり、然れども彼は未だ其の終極の倫理哲學を終る能はず、啻にスペンサーのみならんや、古來幾多の哲學者が絕大の力を盡して而して未だ絕小の確本理をも確しかめ得ざるは彼の倫理の大本なるものにあらずや。然れども倫理の大本の理解未だ成就せざるによりて、人は未だ道德上の善惡を判別する能はざる乎、若くは未だ善惡によりて其行ひを賞罰し能はざる乎と云はゞ、人は古しエデンの花園にありし時より、二尊天の浮橋に立たせ玉ひし日より、即はちカント未だ出でず、ペンタム未だ出でず、スペンサー未だ出でず、孔子釋迦プロアストル未だ出でざりし以前より、善惡の觀念は判然として兩立せしめられ、賞罰の決果は明白に伴隨せしめられ、而して人は必らず善を行ふべし惡を行ふ可らずとの大本理夙に確定せられ存したり。

左れば人なるものは韓退之がポープの註釋を待たずして明らかに其の人となりを知らる、彼は其の外部に數多の肉皮を被ひ冠ぶるに拘はらず、若し之れを截斷して其中心の最中心を吟

味すれば、此の極點の所ろには一種靈妙の良能存す。而して此の良能や極めて潔ぎよく亦極めて可愛らしきもの也、彼は能く彼我の區別を滅し、彼と我とを同一物に變化するのみならず、寧ろ全く我を棄てゝ彼の爲に滅するの尤も爽快なるとを知るもの也、其性や犠性的なり、其質や博愛的なり、其の望みや純潔清白なり、少さかにても高尙なるものあらば之に從ひ似んとを欲す、少さかにても憫れなるものあらば之に惠み與へんとを欲す、所云る身を苦しめて仁に至り、身を殺して仁を爲さんとを欲するもの也。　思ふに此に極熱の白火ありて、彼の人間の肉皮を焼き、更に其の骸骨を焼き、更に其の土灰を焼き、更らに其の靈心中の汚れたる外質を焼き盡さば、最後に殘る所ろは此の尤も潔ぎよき尤も可愛らしき一種不可思儀の良能なるべし。　此の良能今の人間に於ては、未だ全く其の滿身に行渡るとなし、然れども未だ亦た滿身の間だに其氣の多少を存せざるの地あらず。之を以て人何如に好地位に登りたりとも、何如に富貴利達に厭足りたりとも、若し此の最後の良能に於て滿足する所ろなくんば未だ決して厭たるとを得ず、何んとなく物足らず覺えて碌々快々鬱々たり。

第二、道德に二種あり。

人皆な如此き良能を存するが故に、此の良能の理想する所ろ希望する所ろ發して人間の道德となる。而して人の此の良能あるものは古今東西概して殆んど相似たるが故に、之より發して道德となるところの道德なるものは亦た古今東西に概略して相同じきが如し。例すれば義を爲せと云ふ事、愛を盡せと云ふ事、犠牲たれよと云ふ事の如きは、大率ね古今の人情の奥に於て皆な共に希望する所ろ、東西の道德の粹に於て悉く共に理想する所ろたり、故に吾人は如此き道德を擧て人類に固有なる、故に人類に普通なる道德と爲す。然れども人は其の智識の淺深により、若くは其地位の上下によりて、其の道德心を實際に運動するに於て自づから異なる所ろあらざるを得ず。例すれば智識の未だ發達せざるに當りては其子を殺すを以て反つて子に慈ありとするものもあらん、固より之れ均しく其道德心によりて爲すものと云へども其の判斷の不純あるが故に誤まつて如此き殘虐を爲すに至るとあり、之れを智識の淺深によりて道德の實行に差別ありと云ふ。亦た彼の臣の君に於ける、子の親に於ける、僕の主人に於けるが如き、其の社會上の關係約束によりて地位を異にし、地位を異にするに由て義務を異にし、義務を異にするに由て隨て其道德

の實行を異にし、或は一は之に從ひ一は之に命ずるの相違あるに至る、之を地位によりて道德上の實行に差別ありと云ふ。如此く其智識の淺深により、若は其地位の上下によりて差別あるの道德は之を稱して格別の道德と云はん、蓋し彼の一種の普通道德に對して名づくる所ろのものたり。普通道德は人間としての道德あり、格別道德は人間の智者愚者優者劣者の爲めのそれ〴〵の道德あり、一は古今東西に渉りて相違あるとなし、一は古今に於て相違し東西に於て相違し、現今に於ても各々に相違せり。然りと云へども純正なる道德に於ては智愚優劣の差別を一視同仁にし、亦た彼の民權の行はるゝ所ろ、平民論の勢力ある所ろ、上下分權の均一なる所ろ、四民各々獨立なる所ろ、悉とく之れ社會上に於けるの特別地位を打破し、若くは其地位に屬する特別なる道德上の權勢を打破するの傾きに進むを以て、思ふに彼の一種の道德中、所云る普通道德なるものは彌よ普通となり、格別道德あるものは彌よ格別となり、遂に終極の理想世界は之れ普通道德によりて圓滿するに至るべし、即はち彼の主もなく奴隷もなく男もなく女もなく渾然同一道德によりて交際するの天國的となるべし。而して之れ決して空想にあらず、今の道德の進歩は即はち之に向ふもの也、人の道德上の高下は即はち之によりて判定せらるゝ也。換言するに平民的の基督教は宗教社界に於て全勝を得、博愛的の人類教は道德論界に於て全勝を得、君臣平和の平民政治は政治社界に於て全勝を得べし、何んとなれば天は人の上に人を置かず、人の下に人を置かず、只だ人をして自から人の下に立ち自から人の爲に盡さんとするに至らしめつゝあるがゆえ也。

第三、高き者の不德、智あるものゝ不德。

故に現に格別道德の行はるゝ間だに於ては、彼の智識の深きもの、地位の高きものこそ、先づ尤も多く普通道德に近づくべきなれ、即はち彼等は其の地位の高ければ高きほど益す以て犧牲的の精神に富まざる可らず、其の智識の深ければ深きほど彌よ以て博愛的の精神に富まざる可らず、之れ啻に進歩の順序に於て至當の順序たる耳あらず、彼等が道德上の制裁は實に深く如此くに切要するならん。然るに若し其の地位の彌よ高きほどに彌よ普通道德に反き、其智識の益す深きほどに益す普通道德に反かば何如ん、例すれば茅屋の民は盗まざるに王は盜みし、無智の農夫は姦淫せざるに學者は姦淫せば何如、論者は王は其地位の高きが故に之を恕すべし學者は

其の智識の深きが故に之を許すべしと云ふか、天下何の處ろにか如此き暴論を容るゝの地あらん。

嗚呼彼の大功は細瑾を顧みずと云へる一語ほど人世を害したるものはあらず、世人多くは人の不德を寛容するに其の智識もしくは其勳功を以て辨ず、何等の暴あるぞや。若し夫れ尤多く文字を知れるものを尊とまんとならば彼のウェブストル氏の大字書を尊とむに若かず、若し亦た世に尤も大ひある事業を爲したるものを尊とまんとならば彼の蒸氣機關を尊とむに若かじ、嗚呼人は何んぞ如此きに由りて尊とからんや、例令ひ山を移すほどある大業を爲したりとも若し其人に愛なくば吾人は之に心服する能わず、固より之を畏るゝとやあらん、或は之を敬するものやあらん、然れども吾人は決して心服する能はず、人の尤も尊とむべきは其の愛にあり、其仁にあり、即はち其の人の道德何如にある也、彼れ大學者なるか吾人は其智を賞むべし、彼れ大權力者なるか吾人は其力を賛ゆべし、然れども彼もし不道德者なるか吾人は彼が智と力とによりて此の不德を許す能わざる也、嗚呼何んぞ啻だ許さゞるのみならん、吾人は實に彼等が彼淡泊なる茅屋の民、無智にして正直なる農夫にだも及ばざるを信ず、蓋し僞善者は蛇蝎の如し。

第四、男女間の道德の差別。

吾人は此に至りて男女間ゐ道德の差別を置くの何故たるを知らず、特に其の夫婦間に道德の差別を置くの何故たるを知らず、切に今の世界の尤も亂暴我儘なるとを歎す。

此に無禮なる人ありて、女子は男子に劣ると云ふものあらんに、好し萬々一に女子もし男子に劣れりとせば、然らば男子は其の智者たり優者たるの資格によりて更らに道德に高からざる可らざるにあらずや。若又女子は男子に劣るものにあらず、然れども其敎育未だ足らざるが故に現今は尙ほ男子に劣る所ろありと云ふものあらん歟、好し然り今の女子は今の男子に劣れりとせば、然らば男子は其の更らに多く進步したるの責任によりて亦た更らに高く道德に進步せざる可らざるにあらずや。此時に當りて男子は女子に優れり、故に不道德あるを許すと云はゞ、抑そも此の人世あるものは進步するに隨つて彌よ不道德に進むものなる乎。

然れども男女は陰陽剛柔の德を格別にするの理あるが故に、亦固より其道德に於て相ひ差別する所なくんばあらず、然れども彼の普通道德の區域内に於て、例へば姦淫を許す可らずと云へる一ヶ條の下に於て、女子は男子ならざるが故に特に

嚴密に制止せらるべし、但し男子は女子ならざるが故に大目に見らるべしと云へる道理ありや、即はち姦淫の一律の下に於て男女は其の裁判を差別せらるゝの道理ありや、在らば則ち野蠻時代の餘習に發す。

若し女子は一種の器械にてあり、男子は之を使用するの優等者にてあらば、即はち男子は彼の數多の器械を使用し乍ら、器械は之れ一主人の下に専屬せざる可らざるが如き道理もあらん、然れども今日に於て、若し如此き道理によりて女子は姦淫す可らず、男子は勝手にて宜しと云ふものあらば、吾人は最早殆んど論辨するに堪へず、祈るらくは今の日本國に尚ほ如此き野蠻人の存することなからんことを。

或は云く、女子は産子の力ありて男子にれ無し、故に貞節の徳に於ては特に女子に重からざる可らずと。如此き論を爲すものは人の子は自然に女子の胎内に出來すと思ふ者ならん、若し苟くも人子は父母ありて初めて出産すと知らば、何の故に異種の子を舉げざるが爲に女性にのみ嚴重なる裁制を置かんと云ふ、彼の濁川を澄まさんとして之を下流に於てのみ施すものあらば、如何ん、異種の子の出産を防がんが爲には只だ之を女性に於てのみ制止すべきか、女性の刑律に待せらる實に過酷、男子の寛容せらるゝや實に非常なりと云べし、然れども吾人は只だ其の過酷寛容の相違を不公平なりとするのみにあらず、實に若し如此くんば決して法律の目的を達するを得ざることを論ずるなり、見よ男子は遊廓に出り、放蕩によりて、姦淫に慣れたり、而して此の尤も不潔なる男子は四面より女性を汚がし來らんとして、而して一朝天使の墜落したるときは則はち只だ此の天使をのみ酷罰して以て姦淫の害防止すべしと云ふ也。吾人は揚言す、男子は自から放蕩を制しがたき也、たゞ女性の貞操によりて其の放蕩の惡決果を世に多からしめじと欲す、男子は自から行ひがたきの淸德を行ふの聖人を土足に踏みて而して吾は英雄豪傑なりと云へり、男子は尤も不公平なる刑律を女性に科して而して女性は法學の研究に適せずと云へりと、吾人は如此く揚言して男子を罵ることを容赦せず、而して男子は何ほ豪傑なりや。

特に彼の夫婦間に於て姦淫の刑を異にするが如きは更に尤も不都合の事なり、彼の未嫁の男女に就ては暫らく之を言わざるも、夫婦は抑そも尤も高尙なる契約によりて成立たるものにあらざるか、云く其家を一にし、其肉を一にし、其の靈を一にして終身相同伴同行せんと、而して男子は之が契約を破り

て咎めらるゝことなく、女子は之が契約を破りて尤も嚴罰せらる。我日本人は此の不公平を顧みず、而して云く政府と人民との權力相逆せり、民權伸ぶるとなしと、乞ふ先づ其の一家内權力の大相逆を見よ。

第五、野蠻、不公平、不正義。

男女間に於ける裁制の今日の如くに相違するは、若し知らず顧みざるによりてならば野蠻の遺習なり、文明の進歩を熱望するものは速かに之を除かざる可らず、若し知つて之を顧みざるが爲めならば不公平之よりも甚しきとなし、法律の完全を希望するものは速かに之を除かざる可らず。若し之を知り之を顧みて而して尙ほ斷行すると能はずんば日本人は實に勇なきの民たり、不正義の民たり。向后慷慨するとを止めよ、國粹保存論も止めにせよ、ステッキも藏さめ去れよ、政府に向つても大言する勿れ、何んとなれば諸君自身すでに如此く野蠻、不公平、不正義なれば也。

樹上蟬あり露を吸はんとす後ろに螳螂ありて之を窺ふ黄雀亦其背に在て螳螂を窺ふ童子樹下に在て弓を持ち黄雀を射んとす後世に禍ありて身を過んとするを知らず。

論說

○食物改良論

津田仙
巖本善治　同著

左は余が津田翁と共に論著したるものなり、翁は之を農政上より立論し、余は之を家政上より立論し、相率ひて我國家富强の基礎を造るとに一臂を供へんと欲したるものなり。

第一章　食物の人躰と文明とに關係ある事

昔し全歐を席卷して天下を聳動したる佛帝第一世那破翁は身千軍万馬を指揮して戎事寸隙もなし而も尙ほ法例規律を彙纂して文化湧くが如し聞く那破翁夜々眠ると四時間に超へずと如此き安息を以て得て此如き大業を爲す固より身躰の壯健精神の偉卓その常ならざるによると雖ども抑亦故あり傳に云ふ帝每日の食膳必ず鷄の腿肉を盛り之を嗜むと一日を廢せずと必竟其腿味は之をしてよく繁務に堪へしめたるなり然るに諸葛孔明の司馬仲達と斜谷に對するや百餘日間相持して互に出でず仲達常に守りて會戰を避けたり孔明乃ち之を激せんと欲して使に巾幗を贈らし之を仲達に遺りたるとき仲達使に問て曰く孔明朝夕の食日夜のと如何んと使者何の故たるを知らず詳に答て云ふ諸葛公朝夙に興き夜は晩く寢ね二十枚以上の罰は親覽し給はざるなし然れども其食は日に數升に至らずと仲達之を聞き餘人に語りて云く孔明食少くして事煩はし決して

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

久しきに至ると能はじと使歸へりて之を孔明に告ぐ孔明慨き歎じて懿よく吾を知れりと云へり、果せる哉忠魂永く斯土に留らず其年の八月三十三年を一期として五丈原草の露と消えたり。

蓋し食物は生活に必要の材料なり此の材料なかつせば喩へば油なくして燈燭の燃えざるが如く人は一日も此の世に生活する能はざるべし若し亦た此材料不足ならば亦た人をして健康に生活せしむる能はざるなり故に生學士は之を蒸氣機關中の石炭に比したり。これ石炭なくして機關の運轉せざるのみに非ず其働きを減少すべきを云ふなり若し石炭足らずんば機關の動力漸々に衰減すべきは必然の理なり。

此故に食物なくして生活せんと欲し滋養なくして健康ならんと欲するは恰も油なくして燈燭の燃えんことを望み石炭足らずして機關のよく運轉せんことを望むが如し凡そ生活せんと欲せば食はざる可らず健康にしてよく勉勞せんと欲せば滋養の食物を多く取らざる可らず之れ明白の事實にして敢て疑ふ可きにあらざるなり之を若し然らずと云ふものあらば則ち學術社會の一笑話たる彼の不斷運動の空理を主張するなり抑も一箇の勢力を出さんには亦た必ず之を出すべき原因なかるべからず然るに今若し生活して運動し健康にしてよく勉勞するに足るべき勢力を出すに於て之に相當する處の食物滋養あるを要せずと云はゞ是れ實に彼の原因なくして結果ありと云ふ不斷運動の空理を主張するものにあらずや。

此を以て人若し彌よ〱勉勞せんと欲せば亦た彌よ〱多く食はざる可らず博士ランケストルの言ふ所に據ればこの事理を實際に證知する甚だ容易なり曰く鐵道建築の請負人なるものゝ職工を使役するはその食量の多寡に應じて之を定むと蓋し食事の際一人の書記をして職工個々の食量を檢査せしめ若し少食するものあれば白墨を以て之に點じ又た其仕事の如何を注視して怠慢を見認め後ち之を罷るなり此れ實に能く勉勞するものは亦たよく食はざる可らざるの事理を證するものと云ふべし。

食物ありて初めて生活し滋養の食物多くして初めてよく十分の勉勞に堪ゆるとは前段の論證によつて明白なるべし然れども人の食物を胃中に受るは素と其量に限りあるが故に徒らに食物の多量なるを以て可なりとせず勢ひ小量にして滋養多き者を選ぶの方を考へ以て成るべく多量の滋養分を胃中に藏むるの工夫を爲さゞる可からず必竟食物多くして初めて能く生

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

活すると云ふものは即ち此の多量の食物より收むべき滋養分の多きがゆゑなるを以て人躰の健康に要する處の者は素と食物の多量なるに非ずして實は滋養分の多量なるに在るなり。此の故に滋養分多き食物を用ゐるものは其畜類たると人類たるとを問はず皆よく發達して且つ健康なるものなり」牛は滋養分少き草類を多食するものなれば腹胃廣大にして身躰自ら重く肥太の四肢を以て漸く之を維持し常に活潑の運動を爲す能はず然れども馬は牛に比しては稍や滋養分多き草豆を食するがゆゑに腹胃やゝ狹少にして身躰自ら輕く細小の四肢よく之を維持して奔走活潑なり其他若し動物園に行て肉食する所の畜類と草食する所の畜類とを比較して其身躰の處置その性質の發達を對比せば凡そ滋養分多き食物を食ふ者は皆多く健康にして且つ多く活潑なるを見るべし蓋し田畠に於て肥を施したる苗と施さゞる苗との生氣を異にする如く動物が滋養分を食ふと食はざるとに由りて其生活力に相違を來すと其理同一なり」人類に就て此理を察するに特に然り彼の太平洋中の諸島に於て稜々豐饒にして火山石ある地方の民と低くして瘠土多き地方の民とを比較し又た該諸島に於ける酋長の骨格逞しきと勞役に服する矮小菜色の民とを比較し又た彼の英國海軍の水夫が大陸諸國の水夫に比して多く滋養物を食用するが故に其力量の大陸諸國の水夫に比して更に強かりしとの明白なる跡に依りて食物滋養の人躰に關係する甚だ大なるとを見る北氷洋洲に住居するエスキモー人等はたゞ脂油類を用ゐるの切要に迫りて滋養物を食するを得ず今に至りて尚ほ其狀態を改良し社會を結成する能はざるもタヒチ島民ハ種々無量の飲食を得るが故に住民凡に社會を結成して大に開明に進むとを得たるの事實に徵して亦た食物滋養の多寡は國民の開化に大關係あるを見るべし。

此故に食物の多きと滋養の多きとハ人躰を健康にし人性を活潑にして文明の進步を助くべし食物に少きと滋養の少きとハ人躰を疲弱にし人性を遲鈍にして文明の進步を妨ぐべし於此乎那破翁の能く大業の勞に耐へ孔明の終に草廬に歸したるの所以を知るなり。

○楓と櫻

湯淺初子

今は盛りと過ぎにけりあはれむかしよ八重櫻けふ九重に匂ひきとかたり傳えしによし奈良の都も今はしも宮居のあとをいつくとし誰れ訪ふ人もなかりけり。

かゝる物から龍田山高尾か峯のもみち葉は時こそかはれ諸共

に時し來ぬれば訪ふ人の絶間もあらで賑はしく神の御業のくすしきを興めつ稱えつ攀じ登る風情はいとゞおかしけれ。人誰かもみぢを愛し櫻を憎む者あらん花を愛づる者は必らず亦た楓をも愛でざらめや吾も人も素よりもみぢを愛し又櫻を愛するものなり今庭前に數十本の楓と櫻あらん然れども他を害する事を爲さず却て一層の趣き添るぞかし然らば如何で是を貴み彼を卑しむるをせん。

是に依りて之を見ればこは造化の妙とや云ふべき人も亦男女の性相同じからずと雖其各自の稟受の長所有り美能あり如何で此れを貴び彼れを卑しむることやゝあるべき男女兩性相待て始て社會を爲すものなれば兩性に高下無くひとしく社會の要素に非ずや然れば其同等なる所の要素相合して一の社會てふ物を作り出すには必らず其抱合に定則あり其要素の數量其定則に反する時は決して眞の文明の社會と云可からず夫れ一夫一婦は天然の通則たる事更に言を待たずして明なり然るに其自然の法則に乖き社會の躰面を穢し其本心を暗くし其家族てふ一の美しき抱合物を分解（decomposition）せしめ國家を恨みと嫉みと怒りのみの世の中とならしむるも敢て顧みる所なき潮流は如何なる源より出る乎夫れ禽獸の樂みを樂しむ者は禽獸なり人類の樂しみを樂む者は人類なり禽獸のとは畧して云はず人類とは如何なる者を云ふ乎そは神の造り給へる目的に叶ひて都て己の能力を用ひて其樂しむべきを樂しみ其愼しむべきを愼しむをこそ論者或は言はん我等素より樂しむべきを樂しむ者なり如何となれば神巳に人間に欲情を與へ給へば是即ち我等が情欲の樂を樂むは即ち神の御心に叶へるにあらずやと此言は遁辭とやいはまし蓋し其情欲及び其他をも適當に用ゆるは宜し然れども其の度を越ゆるに至りては之を罪と云ざる可らずそを罪とも思はざるぞ淺ましき盜みする人誰か之を尊敬する者あらんや人を殺す者誰か之を愛するものあらん哉然るに之を同等否（徳義の上より見れば）却て之よりも重き所の罪を犯す人を敢て惡まず卑しめざるは社會の腐敗を見るべきなりそも〳〵我國に於て中等と云ひ上等と仰ぐ所の社會を見よ其品行は如何其樂しむ所は如何其家族の狀は如何其細君に對するは如何吾これに答ふるに善良の言を以てするを得ず人言はず哉三角分子の抱合は圓形を作すこと能はず方形の分子は方形の塊りを作ると人間社會に於ても亦然り一家は一國の分子なり元素なり一個人は一家の分子なり要素なり其要素たる一個人に於て不潔の行をなし恥づべきの所爲をなしな

がら恬として恥る色なき輩の如何にして清浄潔白の家族を造ることを得ん哉是の不潔破廉恥の家族等集つて如何に敬ふべく尊とぶべき一國を造り出すことを得んや此れ到底望む可らざるの事にして千万年の久しきをふるとも真の文明即ち我々三千有余万の同胞兄弟姉妹と共に精神上の快楽を得て愛すべき淑べきの状を我日の出の國に呈出するとを得ん哉依に我々同志相計りて改良に盡力し諸兄姉の助力を得て神の祐助によりて國家の基本たる夫婦間の腐敗を一除し固く倫理の基を立て以て從來の汚穢を雪ぎ外は以て各國の侮りを防ぎ内は以て國家の安全を保ち仰で天に愧ぢす俯て地に愧ぢざるの一家族の集合を見ることを切望するが故に鄙劣を顧みるの遑まなく茲に廣く賛成者を得て一致協力し吾人の敬愛する政府に請ひて我國人民等しく政府の保護を得て其品行を保ち其家族の安寧を保たん事を歎願せんとするものなり。

批評

○日本華文を祝す

不知庵主人

余は未だ廣く支那批評文を玩味せざれば三昧先生の日本華文を見るも充分に評して先生を満足せしむる能はず。曾て新評戯曲を讀んで學海小舟二翁が穿細の眼光に驚く、後ち國華發韞を讀んで愈々學海翁の伎倆に驚く。然れども驚きしのみ、歎美と讃辭を呈するの外は知らざりしなり。日本華文に於ても又然り。粗鹵の余と雖も豈に三昧先生が慧眼に驚かざらんや。然れども新評戯曲及國華發韞に抱く所の感情と仝じく驚くの外は——讃美する詞をも知らず。思ふに支那批評法も又一種の妙味あるべけれど余の如き其道に暗き者には其妙味を發見し得ざれば、アヤフヤに論評を試みんよりは寧ろ相當の讃辭を呈して我文學界に日本華文の現はれたるを祝するの優れるに如かず。山陽曾て一齋が己れの文に雌黄を加へしを見て怒て曰く「彼が文字は細絹なり我が文字は粗布なり細絹は美なりと雖も粗布を補ふべからず」ト。蓋し一理あるの詞にて狩野を以て土佐と同一にすべからず、南宗を標準として圓山を評すべからず。余は西洋の批評法を好めばとて豈に盡く支那批評法を罵倒せんや。彼も一種の妙味あり、是も一種の妙味あらん。若し其妙味を悟らずして單一なる西洋的の眼孔を以て此日本華文を評せば恐らくは肯綮を誤り、畢竟細絹を以て粗布を補ふに異らざるべし。故に余は漫りに論評を加へず唯數言を陳して日本華文を祝せん、若

し此祝詞にして讃辭ともならば則ち余が幸福のみ。
今は文學界の戰國なり。馬琴種彦の流を酌んで舊壘を固守する者あればリットン、サカレーを奉じて新軍歌を唱ふ者あり、雅俗折衷の聲援言文一致の遊兵三々五々互に雄を爭ふ、合縱して硯友社となり連衡して好文會となる。此時に當て日本華文の顯はれたるは例へば六韜三略の意鉢を受て孫吳が七書を講ぜしが如し。兵に規律法度あり、文壇に規律法度なからんや、雲の如く湧き水の如く流れ龍虎の姿を現じ奔湍の勢を成すとも其間自ら一種の法有て存す。日本華文は則ち其法を教ふるものなり。世人常に文章規範の文章家を作らざるを嘆ずれども文學の進步を助けしや疑なし。日本華文は果して文壇の指南車たるべきや否や覺束なけれども。余は幾分か文學の進步を助くるを信じて是が生誕を祝す。世人何故に文法修辭の無益を說くや、下手監物が兵法は藤吉郎の爲め破れしかど竹中重治の謀略は筑前守を助けしを知らざるか。
實に世人の云ふ如く文章規範を通讀せばとて文章家となるを得ず。然れども古今文學家を見るに大抵嗜好する處の先人の文是が師範とならざるものなし。スウィフトは好んでラベレーを讀みスコットはサーバンテスに胚胎す。されば古文を讀むは文章を硏磨するの術にして其進步を助くるは則ち批評なり。要するに批評と創作とは其時代を異にすれども精細なる批評の顯はれたるは文學の頓に一段を進めたる徵にして愈々進步したる創作時代を造出す。ハズリット出て、シェークスピーヤの美益々顯はれ、金聖歎筆を下して施耐菴の妙初て知らる。批評の重んずべき事今更に云ふべくもあらねど批評を濫用して罵詈の方便となすことゝ心得ぬ事あれ。此頃の批評家の常ながら、支那人の批評は讚美を專とすトブ是が反敵に立つて誹毀を目的とするを以て西洋の批評法となすことそをかし。今の批評は例へば尺度を以て齒を計るが如くならざれば蝨眼鏡を掛て疊の塵を拂ふに似たり。是をしも批評と云ふべくんば批評家ほど容易なる者はあらじ。アヂソン氏是等の批評家を論じて曰く「嗜好も學問もなき批評家は公衆の甘受せざる文章を賞づるを欲せずして大抵些細の瑕瑾を難ずるを事とす然れども斯は極めて容易にして諸當の讀者猶ほ能く嘲弄を逞ふし得べく而も其指摘する處往々正鵠を得るなり彼のドライデン氏が愉快にも

Errors, like Straws, upon the Surface flow;
He who would search for Pearls must dive below.

（「小瑕瑾は藁の如く表面に浮ぶものなれど眞珠を求めんとする人は其下に沈まざるべからず」）

なる名句を吐きたるは面白しト。」實に斯の如く西洋の批評法ありと雖も豈に誹毀を專らとせんや。眞正の批評家ハ缺點を擧ぐるよりは寧ろ隱れたる美を顯はして世間に告白するを以て主務となし、ハズリット、クレイク等は皆シエークスピーヤの美を世に吹聽せしにて今の批評に比すれば霄壤の相違なり。詩は韵致あるをもて尊しとす杓子定規に一分一厘の差なしとて何かせん、室は用材の宜きと床襖の好を愛するのみ蟲眼鏡にて見るほどの塵ありとも傷つくるに足らず。ベントレイがミルトンの詩を難じ是に添刪を加へたる如きは却て識者の笑を買ふべし、何んぞ具眼者の欲する處ならんや。全じく論評を試みしかどアヂソンが失樂園詩に於けるは皮相の觀察にあらずして深奧を發現せしなれば長く後代に模範と爲れり。今の批評家を見るに二三を除くの外は大抵ベントレイにして徒らに字句の末を議し若くは諧謔を以て戯るゝのみ。眞正の批評は容易に望むべからざるも罵詈嘲弄を專とする此批評時代に日本華文の如き眞摯ある批評顯はれたるこそ喜ばし。假令支那の批評法は完全なるものにあらずとするも此罵詈嘲弄時代に嚴然と顯はれたるは例へば兒童喧騷の中に鶴氅を着したる道士の立つが如く邈として犯すべからざるの姿あり。

故に余は斯の如き書に辨難を試むるを欲せず、ベントレイとなる能はず又アヂソンともなるを好まず。唯數言を陳して祝詞となすのみ。然れども余はプーセルをエチイド以上とする諂諛者となるを願はず、三昧先生の眼光熒々たるに驚けども未だ聖嘆を全視するを得ざるなり。

(93)。女子必携　一册中本百五十六頁定價四十錢　發行所東京銀座一丁目十一堂

此書は米國キチンガーデン會にて出版したる家事經濟書をば栗塚龍女史が抄譯せられたるもの也、第一章臺所の事より洗濯室の事、食事室の事、室内の仕事、家の掃除の仕方、衣服の事、書房の事等に至る迄でを七章に分ち鄭寧に說きたり。然るに原文を其儘に譯し毫も本邦の事情に適するやうに改めたる所ろあらざれば、此書をよむものは純然たる西洋婦人の家政を學ばんとするもの、若くは此の如き方向に參考せんと欲するものゝみに限るべし。一例を擧れば百二頁に、

燃付け方にマッチを用ふるときはマッチは必らず其箱の外端にて擦りて火を出すべし壁又は其他の外面の麁きものに就きて摩するも能く火を生ずと雖とも其痕跡の醜くきを遺すが故に必らず避て之を爲す可らず且つマッチなるものは松の木片に硫黄を貼して製したるものにして云々

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

如此し。

○「お八重」の評拾遺　ふ、ち、

兄弟分の梅之屋が大ざつぱに評して小瑕瑾は日はずト容儀撥て筆を止められたが我れは承服が出來かねる。著者は餘人ならぬ忍月居士、小瑕疵さてやはか見逃すを得べき。遠慮會釋なく申さうぞ、聞しめされ忍月居士。

序文はよくもなし惡くもなし。「これさても作者が一生懸命」云々は世間著作家の針砭とすべし、千辛萬苦して鍛りに鍊てヤレ俗務繁忙トカ咄嗟の作トカ逃口上を並べる方々チト慊なまれよ。

第一回。　春の風ぬるみし云々の一節うまし。「オヤモウ十二時ダワ」云々の詞は解らず、「早く編んで」トあれど編む模樣更になく櫻炭をいけ新聞をたゝみ湯を沸かし花を挿けるは何故か、「旦那を」は茶屋女めきてをかし「旦那さまを」と改むべし。「アラーまッタなア」云々芝居めけり。「おれが一昨年下宿してゐる時分は」云々、是も仝樣。忍月居士は芝居がお好かしらぬが事實あるまじき詞或は仕組頗る多し、小説は芝居と違ふところよきゐ。「一生不具のお方におなり申した」云々、いゝ、おなり申したとは何れの語にて候ぞ、江戸ッ兒のわれらにはつやゝゝ心得がたし。松葉新次が障子の外から聲を掛けるは「樣子は殘らず聞きました」と襖を開ける狂言なり。「人の話をけなすから」云々の松葉の詞は忍月居士の筆とも思はれぬ、道德と小説を混同するは我等も不服だがコンナ文字は親子兄弟の前で高聲に讀まれますか、波之助にあらずとも苦笑をすべし。

第二回。　此趣向は天保、一錢にも當らずき批評家の忍月居士ならば骨筋出して罵り給ふべきに。「兼て暴探で探偵したる太刀新の盗賊ッコ動くなッ」とは何たる長きダレ詞ぞや、是では盗賊は驚くまじ。「ヤレ忍びの巡査皆々立合なされ」とは波之助も中々芝居には凝つたもんだ。幸ひ車は二人乘トあれど二人乘の車の掛方にはなき筈なり、尤も東京からト申せば仕方がないが。停車場の場は金水よりも劣ちますぞ。寒さ凌ぎにビール五六本トハ便利な鐵道の世の中ドウ不違つたもの、町人躰トあれど詞は職人風の樣に思はる。

第三回。　歌留多備しの趣向、是も事古りて面白からず。さる日ある人の小説の歌留多は人しれずト物や思ふト人をも身をもト外數首に限るト語られしも面白く覺へたり、忍月居士の此章を讀んで猶さら。母親の先入心に「行儀作法まで誠に上品で」トあるが前回の三十一頁にお八重は品格の高尚を缺くトあるに矛盾するに似たり。お八重の詞「アノおふくろ樣」はいぶかし、「御隱居さま」と改むる方よし——疑はしくば春の屋主人の「可憐嬢」を熟讀あつて成程と思ひ給へ。此お母さんは初めに不興顔後に不憫尖から心配と三變したる苦勞性にも似合ず何の用事か知らねど若い男女と雁婆さん一人を殘して西京の本家へ歸るとはサテモ無要愼、ソレトモ粹を通したノ……はアて子。

第四回。「志を立てゝ郷關を出るの日」云々より五十四頁に到るうましくゝ少しは若簡も云ひたいが先だけは辛抱しませう、厭憎の上出來なれば。「オヤ敵が」トお八重が敵を掃ふ、後段にはお米が蠅を掃ふ、いづれ似た趣向。

第五回。　母親の手紙に「身元の分らざる夜遊」とあるは一向に吞込めず、第三回ヨ「器量と言ひ言葉と言ひ行儀作法まで誠に上品で」と母が思ひしは嘘なりしか、曖昧な……。

第六回。　此處大わるし、永對話にでもありさふな處——明治の文學界にかゝる文字あるかと思へば嘆息。琴唄を出されしは……嶄新と賛めたいが。越後縮の白帷衣とはなんぼふ目新らしき心地せらる我れ未だ目睹せし事無之候、殊に夕方の散歩に越後縮とは熱帶地方ヂヤあるまひし。「聞取れて居た」とはをかしな詞、是も何れの訛言なるか、「聞惚れて」としたし。非常に有がたく堪へず冷汗が流れ出る云々、我れらも有難くて背に冷汗を覺へたり。次の間から肴と焼酎を持來るとは——命令もせざるに、此老婆昔しは婦多川のそれ者と見へる。九十七頁「ハイハイ早くお歸んなさい」以下お八重の詞殆んど嘔吐を催ふす、忍月居士にも似合ぬぞ。惣てお八重が詞梅暦より脱化し來る……妙と曰はふか、どふしませう。序に波さんトカ波さまトしてわちきトしたら猶は妙であろ。新内の文句を挿まざるが殘念とぞする。

第七回。　此回是と云ふ申分もないが、唯うまいものゝゝ。白氏文集の神髓を得られしものと賛め。白氏の好きな方々は有がたく拜讀仕るべし。我れは好まざれば……。

第八回。　お咲の手紙は情なき文句にて勝手氣儘と申すべし。忍月居士願はくは娘節用を繙き金五郎の相丈小三を訪ふる一節を熟視せられよ、我れは兎かふ申さす。お八重が手紙天晴名文章稗才筆ある乎石魂錄の秋の外は知らず、「鏡花水月觀じ去れば本來是れ空意馬心猿悟り了れば即ち菩提」の句は馬琴丸出しと存じ候。これを僅かに三時間にて認むとは恐ろしき神筆、われもお八重の跡を尋ねて其門下に學ばん。シルレルのグロッケを抜きしお手際、われら如き無學者はアット感佩仕り候。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

第九回。　談話の文句に就き多少不服の處もある、が……後へ言へぬが花。

第十回。　瞎眼新聞と讀賣新聞をもぢつた處は甘いもの。ダガなぜ著者はコンナ無關係な事を持出したか波之助ばかりか斯く申す評者にも一向分らない——遠し遠からん意味がありさふだ。近郊散策でお八重の家を知ると云ふは甘い様であるが矢張古い。

第十一回。　藤の屋ヵ云はれたが「捨小舟」の結局と比較すると數段の相違がある、ダガ甘ふござるぞ。前には八犬傳な引かれたが今度はズット遡く腓物語とは中々なつだ。申すまでもなく著者は自國の文句にかぶれ曲山人と谷峨の趣向を盜つたものである。全篇を通讀せずして此十一回の前半を見るとお八重も中々可愛相で涙腺さへ我は弱んで江州司馬とならん。此書中で我等の氣に入つたは蕪村の琵琶行の圖である、位置が好いからだが中々見榮がする。是ばかりで千金の價値がある、まして本文がすぐれて好いから。殊さら我れ若し講評十種を選まば先づ第一に「お八重」を錄せん、我れ若し明治の小説家を誰ぞと問はるれば必らず忍月居士を其中に數へん。嘗て「浮雲」を評し、又獨逸の詩句を譯し、又「捨小舟」と「お八重」を著はして縱横無盡に文壇を飛脱されたる恐ろしさ、我に東船西舫悄無言唯見江心秋月白の感あり。東洋のレッシング……慥かに貫目が見へますぞ。

雜錄

○女學雜誌の假名は亂暴なり　記室子

假名づかひは實に困難なものです、はとわ、ひとゐ、へとゑ及びゐなどは尤も誤まり易き者ですが、女學や文學を主意とする雜誌記者は注意の上にも注意すべきとです、畢竟は日本固有の文學を顧みざる結果でしやう、噫○○記者チト御注意ありたし〳〵」とは新婦人第九號に見えたる注意なり、吾人は果して之に注意したるに、蓋し女學雜誌の假名遣ひに對して忠告せられたる一文章にして、必竟吾人に親切なる恩言とこそ思はれたれ。謹みて謝す、但し吾人は平素假名遣を八釜しく言ふ人に感服せざるものにて、隨つて放逸氣儘の彷訓を旋すと屢ばなれば、爲に優雅なる古文學者に叱らるゝとも亦毎々なり。然ども若し吾人が信じ且安んずる所を有の儘に申せば、吾人は今日何によりて假名遣ひを正しくせばや其の標準を知ず、次に多少其の標準を知るも之に頓着するとの至つて馬鹿々々しく面倒くさく思はるゝとあるなり。抑そも假名は何故に用ゆるか、一は六かしき漢字にフリガナして其訓方を知する事、二は漢字の餘音を示して所云る送り假名を記す事、三は接續てには等の語句を記す事にあるならん。故に苟くも全文章を悉とく假名にて書一個の漢字をも用ゆるとなきに至らざる以上は、大要、假名によりて意味を悟るにてはなく只假名によりて其音を知なり。例せば源氏とあらんに、之にぐゑんじと假名ふりしたるによりて初めて源氏と悟りたるにあらず、ぐゑんじの響きにより源氏の音を聞得たるが爲に之を悟りたる也、故に當今はグヱンジなどゝ書かずゲンヂと訓する方遙かに優る。送り假名も亦然り、之はと書きて之ワと讀まするなど實に笑ふべきとなり、然し此邊は人の目にも見慣れたれば改むるに

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

及ばず、其他は可成く語音と字音とを近くすべし、徒らに古しの万葉とか物語とかに真似するは、チヨウセル、シエクスピア等の綴字法によりて悉とく今の英文章を書かんとするが如し、實に馬鹿らしき忠義なり、と斯く愚考いたす。

左ればとて文學上に一定の假名遣ひあらんとを必要とせぬと云ふにあらず、吾人は可成く其の一定せんとを熱望す、但し其の一定なるものは可成く實際に近く、語音に近く、自然に近く、且つ尤も淡泊容易なるやうに一定せんとを熱望す、故に若し此如くに定まりし時節に至らば吾人は卒先して之に忠義を盡すべし、但だ只だ今の如く意味もなく八釜しく言ひ、偶には反て實際の語音に遠ざかる迄の訓を附し、寧ろ貴族的にフリ假名し返り假名して一汎の人に分り難きに至らせ、而して吾こそ古學者なりと云へるを見ては何分に感服する能はず。今日英語すらサイレント(默音)を綴るの無用を論ずるもの多し、然るに日本に於て、即はち此より新文學を開かんとする今の日本に於て、言ひ換ゆれば電信文のみにて交通もせず、假名の會員のみが文章を書もせぬ時代に於て、改めて之より窮屈に假名を遣はんとするは實に迷惑の事なり。　今は假名遣ひの亂暴にてあるべき時節なり、即ち此の亂暴時代より一定の新規則を生ず。吾人は古文學を知らざると、面倒くさきと、馬鹿〳〵しさと、餘假の少なきと、活版所の多忙なると、且つ多少信ずる所あるとによりて斯の如くに亂暴なり。

昇空子亦た亂暴に女學子先生に代りて辯ず。

○戯　號　ふ、ち、

千七百六十九年より千七百七十二年に到る殆んど四年間倫敦のPublic Advertiserの紙上に折々顯はれたるLetters of Junius(ジユニアスの書翰)ほど公衆を騒がせしはなかりき。在朝と在野を問はず皆其探索に從事せしが毫も効驗なく。著者自ら「余自身是を顯はすにあらざれば誰しも余を知る事を得じ凡ての方策顯問懸賞は悉く無効たるべし」と云ひ又或時は「此秘密を預るものは獨り余にして余と共に死歿するなり」と云ひ天下を愚にせしがパーク、フランシス、ダイヤー等の名流指摘せられしのみにて其疑は今日に到つて散ぜざれど兎に角一世の達人の手に成りしに相違なし。

代々の歌集を見るに「讀人知らず」の作に秀句あり。後世の註釋者種々に附會すれども多くは疑問を指すのみ到底明了にする能はざるなり。然れども名匠の逸品たるや疑ひなし。

今はスコットの著と知らるれどウエーバリー小説の初めて顯

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

はるゝや、文界を震動せしは左もさふずと思はる。無名の作ほど想像を悩まし人心を聳動するものはあらじ、近くヂルク氏が匿名にて歐洲の大勢を論ぜしに大に政海を騒がせしと聞く、變名若くは戯號も其名を晦ますが爲にして往々世を欺むくことあり。アダムビードの著者がGeorge Eliotと名乗りし時は誰しもマリヤエバンスなる婦人たる事を知らざりし。ジオルジ、サンドもマーク、トウエインも皆本名にあらずして英米の文學者は新聞雜誌に投寄するに戯號を用ふるを以て常となす。サカレーはチットマーシユと名乗りスミッスはプリムレイと號して雜誌の紙面を耀かし。又ヂッケンスはボズの名にてアービングはクレイヨンの稱にて小品文集(Sketch Book)を著はし。又スウヰフトはビカスタフと號してスチールはアイロンサイドと稱して共に卜星家を氣取りたる事あどは最も高名にして世人の能く知る處なり。是等の人々が斯く戯號を用ふるは自ら韜晦せんが爲めなれども日本に於ては然らず。俳偕を知らずして――絶句だに作らずして――箸詁山水をも崇く能はずして、否な一丁字を解せざるも勝手氣儘なる號を持つとれをかし。旦那樣が仔細らしく篆刻師に命ずればおさんどんも何々女史の拓植印を所持する日本の風俗。耳目に馴れたれば不思議にも思はねど、考へればサァも厄介なるお荷物とこそ申すべし。ホルランドが雜誌に投寄してチモシー、チットカムと名乗りし時は妻君だに其秘密を知らざりしに日本に於ては名刺に其號を記す事珍らしからず。東西輕重の甚しき、何れか雅趣に富むや我は知らず。

○世と望み　　やまだ美妙

世の　中に　なにか　ある。
人か。否。鳥か。否。
けもの? 否。草木? 否。
すめる　空ら、うごく　水、
ありや。否。無きや。現に。
世の　なかに　なに　あらむ。
思ひつゝ　無しと　いふ
われさへも　なき　ものを。
何あらむ、理の　ほかに。
理は　神よ、のぞみ　のみ。
あゝ　のぞみ、したしさよ、
なつかしさよ、たふとさよ。

行く水は　行くのぞみ。
咲く花は　咲くのぞみ。
かくて こそ 月も行け。
雲も　たて　人もわれ。
これなくば ゆめぢ のみ。
無爲の　無爲、見じ聞かじ。

右は「のぞみ」てふ長詩を作りそのに序せんとてつくりたる短篇なり（未定稿）　美妙

○紅蘭女史逸事　一のふ

余が友湘煙女史十四の時紅蘭に面したり、紅蘭晩年奇病を發し甚いだ貪ぼる、大言して云く凡そ錢を持たざるものは來り訪ふも用なし、錢に非ざるの話しは聞くとも効なしと、其の賤劣眞とに悲しむべきほどなりき。然るに湘煙が星巖氏の事を談ずるに至れば肅然として容を改ため、涙泫然として謝するやう、汝ぢ年若くして吾が先生の事を問ひ玉ふ、好意實に限りなし、故に平常決して他人を容れざるの禁室なれども今ま汝ぢに示して妾が思ひを報ゆべしとて、湘煙を引いて奥に入る、席七八疊、机一脚、書庫若干、端正しく煙草盆傍へらに存す、布置整嚴、恰かも梁川氏在世の時の如くなり、紅蘭室に入り彌よ謹しみ淑雅温良として殆んど別人の如くなりしと。

○眞とに樂しき所ろ　みどり

慨然として鋤を擲うつは實に情に於て最早や忍びがたければ也、兵馬炮煙に嘶なき戰功正に成るとき豈に月に嘯ふきて泣くの愛情なからんや、平生大志あり寧日なくして拮据す私かに天下の豪傑を以て許すとき寧ろ幼兒を見て羨やむの念あらざらんや、嗚呼、大功を立つるは欝勃の情を發するが爲なり、平々安々蕩然として樂しきは則はち家族團欒の理窟なき上下なき世辭なきの間だに在り。

○幽靈の哀訴　北越樵婦

春の日脚のいさ永く終日山に働ていたり肢體の疲れしものから其儘爐邊に横はり折り來し薪の火光にて女學雜誌を閲する折から人影朦朧在が如く無きが如くの怪物を見る樵婦怪み熟視すれば何ぞ計らん無數の女幽靈ならんとは糸より細き悲聲にて云ひ出るやう近來女權論は極て盛に行はるれども何たる故のあるとにや尺の女權は議論上に伸て寸の女權は實際上に伸びず恰も早天ヨ雷鳴の耳朶を打つのみにして一滴の降雨なきが如し婦人の世界は心配の世界なり日本全國の千數百萬の女性中此境遇を脱するを得るものそも幾人かあるさ言央にして數も知れざる幽靈等しく聲を放ち號泣せり。

樵婦山間に明月を伴とし身は朦朧の境に在れども心時として世愁海中に浮沈するとなきに非ず故に女權論に多少の持論を抱くものなれば幽靈のなげきさこそさ思ひやられ涙に咽ぶる幽靈を慰めて當時賢明なる「ヨロン」王のましませば王に謁を乞て訴ふる所あるべしさな憂ひ玉ふな妾これより御伴致さんとて幽靈を携ひ都をさして上りたりやがて王宮に至れば謁を玉ひて且心中を吐露するの自由を許されたり仍て言上して曰く我々女性の大王に訴ふべき事多々ありと雖も就中最も切なるは今の女性を幽鬱界より救ひ出されんこと是れなり今の女性は身に必要の財産なし人間財なければ何事をか能くなし得べき陋巷に水を飲むの顔子顧みる人のなきは以て證とすべきなり女子に產なきは恰も骨なき幽靈の如く飄々乎として獨

立する事能はず大王國家の獨立を保ち文化の澤に浴せんとせば何ぞこの幽囚に骨を與て同等の人間となし玉はざる試に思へこの骨なき幽囚の胎に身体壯健心識卓絕の偉丈夫が生れ出ると思ひ玉ふかこの幽囚の兒にして肥大なる歐人と戰ひ英敏なる外人と競爭場裡に勝を制するを得ると思ひ玉ふか國家將來の浮沈を考ひ女子其者の不幸を憐まば何ぞ女子に財產分與の法を實行し玉はざる。

此時幽囚群中一時にどよめきて囂しきが爲め其言語は明に知れざれども中に二三の聲音高き幽囚の言のみ聞くことを得たり。

若き女、

妾病に伏して生家に在り父母既に死て家計仁なく醫藥の資を給せず况んや滋食をや復况んや看護人をや貳人門を過ぐるも足を止て一顧せず病日に危く遂に不治の廢人となりたり。もし妾にして幾分の財あらしめば前途尙遠き身にしてこの不幸境遇に陷る如きは萬々あらざるべきに噫。

年增、

昔て父母の在時郎は妾を愛したりき今日父母永眠の日に郎は妾を捨て妓を圖ひたり郎曰く我汝を愛せず然れども家財は汝が夫たるに非ざれば我有たらず今父母死して財自ら我有に歸す豈又汝に用あらんやと家產悉く妓樓に拓て妾數子と飢に泣く死を決せんか愛兒誰るか托すべき嗚呼晉取始に增したる不幸の者はよもあるまじ云々。

老婆、

孫女學を好で寢食を忘るゝに至る一日數年の遊學を家兒に乞ふに家兒學資を女子に給するを惜み堅く拒で其志を奪ふ女落膽して遂に縊死せり悲むべし妙齡の女子大志を抱て空しく鬼籍に入る嗚呼財よ汝何の故に男子に附隨して女子を捨つるや汝男子に伴て或はけがれたる娼家に住み時あつて酒樓にあり而て女子に伴て淸潔なる校舍に在らず愛すべきの兒を育ます眞正なる家婦を慰めず汝が爲に性命を失ふの女子實に小なしとせず我々女性の涙は汝を恐むの涙なり云々。

樵婦囂しき幽囚を制し仰で王を拜すれば何ぞ計らん王は眠りて時經し者なるか呼べど叫べど木佛同樣何の答もあらざれば樵婦が滿腔の積憤一時に破裂して勇氣勃々禁ずる能はず謂くヨロン王我を目して國事犯とせば入獄も何ぞ厭はん保安條例を發すればとて江戶拂も何か辭せんいざ一拳を王の頭上に試みんと大聲叱呼ヨロン王起て我姉妹を救へよと全力を拳頭に集めて一拳又一拳强く王の頭上を打てば手腕爲に痛を感じて痴夢を破る憐むべし罪なき木枕强く打たれて其儘其所に倒れたり。

○玉堂隨筆（五）（ぎよくだうずゐひつ）　南石外史

雄傑は無僞

エメルソンのレプレセンタチーメツンに米國大統領ジョンアダムス翁の晩年の事を記す、蓋しエメルソンが少年の時翁に面會したるの記なり、云く余は我兄と共に行て訪ひたり此の老大統領は背上衣を着し、黑小衣を被ひ、白の靴加袋を穿ち、絹帽を以て無髮頭に冠ぶり、眞率として會わる、此時翁が子ジョン、クインシー、アダムス大統領と爲られたる報告の着せし比ろなりしかば余等之を祝したるに翁云く、吾子は當今余の知れる中にて尤多く政治上の智能あるもの也、彼は幼より能く勉め、出來る丈けの事を盡したりと。

兀骨又折屐

昔て晉書を讀むに阮籍母の喪に居り客を留めて酒を飮む二斗、而して沈醉六十日血を嘔て骨立したりと。彼の謝安が捷書を得て漠然之を棊局の下に置き、客去りてのち屐齒の折るゝ迄に踊躍したると一般、何んぞ其の僞はるとの太甚しきや。然れども阮籍の酒に於けるは實は僞はるに非ず人情の自然なり、謝安の沈着は此れ俗禮に拘泥せしのみ故に后に歡極して大發しぬ、左れば人情の至る所ろは僞はるものにあらずたゞ止を得ず暫らく隱るゝのみ。願くは社會の風禮が自由的、淡泊的、眞率的にてあらんとを。

朝令而暮改

朝令暮改の何如に速やかなるかを見よ而して之が爲に惡制度（即はち改めらるゝ迄に續きし）により人民の何如に苦しみしかを見よ、蓋し之を惡しくと氣附きて改めし迄は人民の疾苦となれると多し、余は暮改の速やかなるに歎ぜず朝令のかろ〴〵しきに歎ず。

優々閑々乎

優々閑々乎たる問答にして而して能く意を盡し毫末の切迫なきは謠曲の問答なり、「八島」に云く、夫に御待候へ此山あるじに申候べし。いかに申候修行者の渡り候が一夜のお宿と仰せ候。余りに見苦しき鹽屋の內にて候程にお宿は叶ふまじき由を申せ。其由申して候へば見苦敷鹽屋の內にて候程にお宿は叶ふまじき由を仰せ候。是は都方の者にて候か此浦始て一見の者にて候ひらに一夜と重ねて仰せ候へ。お供は都の人にて候がひらに一夜と重ねて仰せ候。之れ往復二回、問答三人、優として諧、閑として有力。

性質と身躰

余嘗て人の性質と身躰との關係を取調んと思立ち先づ日本外史につきて山陽が諸名傑を評するの語と其身丈の記事とを并せ錄したり、左の如し

貞任　魁偉善用兵。腰圍七尺長稱之、我兵莫制之不殊、扛三尺楯六人舁之至。

爲朝　猿臂善射。幼凌犯諸兄。

賴朝　深沈有大畧、性堅忍喜怒不形於色、爲衆所畏愛。軀短而面大、然居止詳雅、言語明晰。性忌克。

義經　短小精悍、而白齒出、甚趫捷、爲衆信所思、而目俊爽。

元就　爲人陰沈、肉負音吐甚洪、在隱下號令士卒、聲聞於諸隊。

謙信　美姿儀、沈斷有謀慮。持己愼密、謙間不入。

信長　幼跌蕩、喜武事、被服奇偉、腰帶大刀。爲人許而忍。猜忌、追殺諸將有黨。外優而內猜忌。

光秀　爲人文深、喜自修飾、以材藝自高、

政宗　眇而毅髮、奇偉者。

秀吉　矮而黑、無仙骨、唯見其目光爛々射人、不可仰見。爲人酷貧、交登漸武、而雄才大畧逸出其右。

輝元　狀貌尤魁偉。

家康　□而雄武强任。爲人沈毅有大畧。用兵如神而好學、求治愛人、寬容、處事必規百世之慮、其事朝廷恭順。

下ぞめして

紅葉を詠する歌にーたぞめーてと云ふ句多し、然るに余が過日瀧の川に行て楓を觀たるに皆な上部紅葉して下部尙ほ靑かりし此れ蓋し日光と霜に當ると等の關係に出で理に當れり、故に歌人の偽を知りぬ。

歌人理學士

花月草紙をよみて考へたり、博物學者なき間だの博物學者は歌人及び文人なりしさ、何んぞ其の自然を見るの巧且つ脳なしや。

夜中の燈灯

夜中遠く燈灯を望む余靜かに立ちて考へたり、之れ往くものか來るものか、思ひ當りぬ其四きは來るもの欠けたるは往くものなり。

吹立ん〱

○馬の鼻毛ぬき

山家邊のもの江戸見物に來て日本橋をうちわたり通何丁目の邊にて一んと燭台のしん切りをひろい宿へ歸り之は何で御座りまうすと問ふ、亭主をどけものにて夫は鬼の毛ぬきじやといふ、何でも珍らしい物で御座る國へ歸りてお寺へみせ申さうとてやがて國へ下りて先づ人々に見すれば如何にもそうで有るべい家の寶にしめされと云ふ、名主きいて何ぼう重寶でも用に立ねばあんにすべい、何んと之は村中の馬の鼻毛ぬきにしたがよかんべいと云ふた。

○一時の榮花

一時の榮花に千歳を伸ぶると主人の留守に家來ども集まり茶を煎じて飲しが、すね平と云ふ男つねに旦那のめさるゝ茶碗を取出し飲けるを傍輩が見てやれこゝなすね平は分のない奴じや夫は旦那の茶わんではないかと云へば、すね平がすね顔をして何をぎようさんにいやるぞ旦那じやとて別に穢多ではあるまひし盗かきでは有まひしおれが此茶碗で飯んだら何んじやとぬかした。

○天笠浪人の宿

玉淵を窺がわざるものは龍を知らずとかやすんと遠國のもの四五人連にて京へ初めて登り御殿を拜み奉まつらんと本町を通りしが、火の見やぐらを見つけてあれは何を賣買する所ろじやさてく長い家かなと云ふ、連の内に賢こだてある男が扨も都は自由な所じやあれは鎗もちの雪隱じやと云ふ、一人が云ふはあれを見や太鼓があるからは神鳴殿の下屋しきであらふと云ふ、一人が云ふ左うでは有まい人が二人三人見へるほどにあれは天笠浪人の宿であらふと云ふた。

兒籃

○乙女亞利斯　(第一)　波月子

御つかさん私が居なくなつテモ決してお案じ遊ばすな私はモイッソさんの處へ行て來ますから、おくすりを取て來ます、よくおよつて御いで故に御起し申しません、御目覺迄待て居りますとタイガーの山を越へるようにありますから直きに歸て參ります　と一人の小娘年は十二三でしよう病み疲れて床の上に睡て居る母に言を殘し日のくれぐに一の藥瓶を提げて里のモイッソと云ふ醫者の所へ出掛ましたが急ぎに急ぎましても小供の足故に三里の山道はなかく骨が折れますちようど家を出たのは六時頃ですが夜の十時過にモイッソの處へ着きました玄關口より案内を請て藥の調合をたのみました信切なモイッソは　アリスよ(此の娘の名)大層遲く來たではないかモッット早く來ればよいに御前歸るにはタイベルの山越をせずばなるまいキードの谷川はもう渡れますまい　サヨーで御ざいますか十一時が過ますとアノ川にある橋は沈でしまいますソーデ、兼て承知いたして居ましたが母がいろく心配いたしますから睡て居る時を見計て出てまいりましたたい今モー何時デございましよう○モイッソ氏は時計を出し今十時十五分過デス急いで歸つたらあの橋の沈まぬうちに歸れようがしかし今夜は此處へ宿てあす川の水の引た時分に歸りなさいタイガーの山を越せば二里計りの廻りとなるしいろくの恐ろしひ事が度々ある山だから小供一人ではなかく通られません。アリスは自分のこわい事よりも恐しひ事よりも母の病氣が心配でたまりません　先生しかし今夜は母一人で御ざいますから是非とも歸らねばありません走つて參りましたらキードの出水迄には間に合ひましよう間に合わずばタイガーの山越しをする計りです。モイッソも心にあやぶみま

したがしかし遲くも明日の朝迄には自分の調合した藥を飮ませずばアリスの母は助りそうもありません自分の僕に申付て持たせて遣ろうにも不信切な事があつて病人の元に藥が屆かあければかへつて仇になるし、むしろ此娘を勵して、シカシ十二三のアリスがドーシテあのタイガー山を越すことがいろ〲考て居ると　先生私は參ります間に合わない迄もキードの川迄行て見ましよう早くいたしませんと時間が。勇ましく立上たるアリス氣遣わそうなモイソン　アリスこれから行くつもりデスカ何となく空の色もいやバシ宿めたいがしかしこの藥はわすの五時迄に夜の明ぬうちに飮ませねば効がないノダカラそのつもりでいそぎなさいそれならモー行きなさるか‥‥アー一寸とお待ち。懷中より一挺のピストルを取出し。これを持て用心をしていそいでキードの川迄四十分しかあい忘れた〲このランタルン（ストーミー、ランタルンとて風なきの時に使ふ物）を持つて行なさい。何から何迄信切に云て與れる言を後にアリスは與一文字に走せ出しました里よりキードの川迄は一里ほどデスキードの川と申すは夜分は非常に水量が增して藤蔓でシツカリ岩に結び付けあるつり橋も水の爲めに沈でしまいますこの水はだん〲に增ノデなく十一時頃になると山の上より雷の如き響にて一時に流れ下るノデス。アリスは水の增さぬうちに橋の沈まぬそのうちにといそぎにいそひで走りました右手にピストル左手には角燈。キード川の一町余り手前に來ました耳を欹て、水音を聞くにマダ強き響はいたしませんさては水量が增さず橋もまだ沈まぬと悦えたり今一走りと驅け出さんとする時に足下にヌラリと滑る物があります角燈にすかし見るにこわ如何に一人の獵師が血だらけになりて死んで居ます四隣の草も何も血を以て染められて居るにキヨツトはしましたが强膽なアリスですかの獵師に近寄て躰を動かして見ますにまだ柔かいようデス手を額に置くにすこし温かみがありますいろ〲にして介抱しました今はキード川の水量はアリスの心に忘れられたようです。かの獵師はよう〲に氣が付たようす、目を開てアリスを見ました、　氣が付きましたかドーなすつたノデス。かの獵師は物言ひたげデスがもう聲が出ませんよう〲に腰より野刀と一つの袋を出してアリスに渡し一際高く茂げつた林の方を指ざして死でしまいました。何事と茫然として立て居るアリス、あら慘ましやこの時千萬の雷一時に落つるかと思ふ計りの響。驚くアリス　キードの川は滿水‥‥‥モーイケヌ。

史傳

○宗教改革家

みどり

宗教は人類安身立命の處ろなり、故に若し宗教にして誤まるあらば人世を害すると何物よりも大なり。抑そも宗教に種々の派あり、一々論ずる所ろを異にして皆な各別なりと云へども、然れども其の何んの宗教たるを問はず道徳を害せんとするものはあらじ、而して其の宗教流布の決果反つて人世の道徳を害するあらば、則はち此の宗教は決して真誠の大道理に適へるものにあらざるを知るべし、此に於て宗教改革あるものゝ極めて必要なるを覺る。余は今ま必らずや佛教なりと云はず、亦必らずや基督教なりと云はず、亦必らずや儒教なり神道なりと云はず、然れども若し其の信仰や僞はりに、其安心や浮薄に、其の信徒や不真實に、其の結果する所ろや國家人世に多害あるを見ば、此時ぞ即はち宗教改革者の卓出現出すべき時勢なれと知るなり。今の日本は則はち此の機に當る。

マーチン、ルーテルは西歷一千四百八十三年サキツニーのアイスレベンに生る、父は鑛山夫にして極めて貧し、母に抱かれて戸々に物を歌ひつゝ乞ひしともありぬべし。其顔粗末、前額特に巨大、骨格甚はだ逞まし、眼光悲慘を帶びて鬱憂の質現はる、然れども笑ふときは大笑し、泣くときは涙漣々たり、一言を以て其の本質を云はゞ悲しきと熱心なるとあり、敢て浮華の言行なく、止を得ずして動き、動きて必らず爲す、蓋し堂々たる偉男子なり、然れども敢て頑強忍克なるにあらず、尤も音樂を好み、且つ風景を愛す、或る時は深夜雲の走るを見て「あゝ何處にか柱ある、何如にして雲は支へらるゝか」と問ひ、又或る時は穀草一莖をつくりて廣ろがるを見嗟歎して神に謝し、又或る時は歸路鳥の吟ずるに耳を欹だて、泣きたり、其妻に信任すると極めてあつく、其子を愛すると至つて切なり、突然として談ずれば愚なるが如し、然れども其の主張する所ろを見れば獅子の如し。

ルーテル年少くして友人アレキシスと共に逍遙し、エルフハルトの門に到るとき雷電霹靂、忽落してアレキシスを裂殺す、ルーテルは其足下に於て最愛の友人を殺ろし、此に於てか人世の實相初めて明白となれり、全世界の真面目は此瞬間時彼の目前に開かれたり、永遠不死の觀念彼が心中の中心に衝き通れり、彼は斷決しぬ、チ、余は終生神に仕へん神の爲にのみ働らくべしと。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

抑そも英傑は初めより現はるゝことを求めたるものにあらず、余密かに東西の歴史を考ふるに、先づ世に卓出せんことを欲して而してよく正大の善功を成したるものを見ず、若し夫れシーサル、ナポレヲン、豐太閤、秦始皇の徒を以て眞英傑なりとせば此如きものは蓋し初めより卓出を望みたることもあらん、然れども余は如此き人物を以て慕ふべきの眞英傑なりと認たむる能わず、寧ろ人爲の結構によりて成れる不世出の大家屋なりと見ん、其の倒るゝも現はるゝも余が最深の良知を動かすに足らず。但だ夫れ止を得ずして現はれ、止を得ずして怒り、國家麻亂の不幸に眞慨慷して善に犠牲となりたるの大改革家を見るときは、余は其功業の成就せしと否らざるとに拘はらず、衷心より愛敬す。而して如此き眞英傑は未だ初めより現はれんとせず、時の止む能わざるに至りて卒然として動き初むるなり、孔明が廬を出る、正成が山を去る、クロムエルが鋤を投ずる如きは彼のルーテルがモンク、テッセルの悪所行に怒りて初めて最と静かなる教授の生涯を見棄てたるに同じ。

時に羅馬法皇極めて暴虐殘戻なり、人を苦しむるを物の數とせず、世を欺きて以て天に懼るゝとなし、遂に赦罪券を發賣して黃金を貪ぼる、ルーテル則ち起てり。

ルーテル既に一とたび怒りぬ、基督教の眞理は神が人を赦すにありと確信し、義人は只だ其の信仰によりてのみ救はると覺悟するが故に、彼の貴僧等の威どしも强迫も彼に取りては何んの効もなし、彼は法皇の命令書を焼棄てたり、彼は公然法皇を責罵したり、彼は明白に新教理を唱へ出せり、天下聳動し法皇赫怒したり、然れども彼はいよ／＼安然平然嚴然として叫び廻われり。

ヲルムスの大會には列國の君主居列び、法皇いかめしく立ち、兵士劍を執つて守り、學者神學者注釋者頑强なる幾千の信徒皆な怒りて集まり居たり。ルーテル玆に招かれて單身出場し、眞中に立ち上りて四方を睥睨し、堂々揚々二時間の長辨論を爲せり、云く余が書籍中余が考へによりて記したる分あり、聖經によりて論じたる分あり、余が考へには當に多くの誤りあるべし余は固より之を改むるとあらん、然れども聖經の意義は萬古不易にして一點一畫も變れるとなし、何如なる帝王法皇の命も之を滅するを得ず、諸君余を責めんとせば乞ふ聖經によりて責めよ、若くは亦明白なる正理によりて責めよ、然るにあらざるものは余は斷じて之れを受けず、良心

に反するは尤も愚なり、余は茲に立てり、別事を爲す能はず、神は余を助け玉ふと。ルーテルの論辨正し、故に此の正しきに敵するものなし、ルーテルの眞勇誠信は此の正しきを揚言せしめたり、此に於てか新敎の基礎確立したり、英國のピウリタン、アメリカの獨立、佛國の大革命皆な此に淵源して出で來る、人は人の下にあらず、一齊に天の下に立てり、眞理明白、敎義確立、あゝ之よりして眞の救ひの道となれり。今や實にマーテン、ルーテルを要す、日本よ、汝ちは此を有するや否や。

小說

○わめりえらいぞす　美妙齋

今日草稿をまおらする筈の處やはり少々眼病にて筆を執るにものうく添削も十分出來ず揃ろなく一同相休み申候切角御海容……次號には必らず差上らすべく候

よしはる樣　美妙

○酒鬼（廿四）　勝觧主人

大江戶の花――櫻よりも神田ッ兒の腕を見せる火花。ギヤッと生れた曉に半鐘を相方に生湯を使ふ根性では冬の夜に火の子を見ずば寐られまじ。熟睡しても鎗の音を忘れぬは武士の魂、寢入ばなに銅盥の響でも飛出すは江戶ッ子の高慢。鼻高々と行燈一ッ持出したを首取つたほどの得意顏。此人數が揃つたならば咸陽宮もムザと燒けまじきに。火事場は焦熱地獄。勇ましきは消防組――蒸氣喞筒、凄まじきは燒ける音――阿鼻叫喚の聲。黑烟となりかゝつた中から赤き舌を吐き出すと諸共にパット燃立つ炎に包まるゝ土藏、無殘……勢よく吐出す火の息。屋根には衣川の辨慶と云ふ身振で動かぬ黑裝束。足には炎――身躰は喞筒、水火の責を受ても泰然としたる火消氣質。頓て小頭の合圖に纏を肩に隣の棟へヒラリ、跡は頽るゝ音瓦雜々々。

「ヤッ……落ちた……ヤアレ……アレ」

「落ちましたナア……ドウモ……」

氣の毒さふに語る老人二人の傍に膝ッきりの衣服に高下駄のお國書生、是も二人連

「ドウモ奇絕ヂヤ……」

「エライ人が駈をるナ……コレどふする……」

簞笥を擔で來る男「邪魔ダ邪魔ダッ……」

「コリヤどふする……エヽ」お國訛りきんでも突飛される「エヽ……チエスト」の扼腕――是も若失となる。

一万燭の電氣燈でも……ト思ふほどの明るさ、白晝とは愚かな譬喩。眩きまでに往來ふ提燈は諏訪の狐火もコンナ風かと思はる。本能寺の夜討か、但しは赤阪の遠寄か。弓張の群集——戸毎の高張。震へる聲を絞立て寒を追まくる黒裝束の木遣、三間梯子と纏を先に勇ましき喞筒。引續て見舞客に應接する門々の忙がしさ。

「お騒しひ事で……堀の伊勢文で御座イ升」

「おやかましふゴザイ升……通一丁目の橋本屋から參りました」

「有難ふ存じます、伊勢文さんで……御遠方から、ドウゾ宜しふ。皆さん……ドウモ御苦勞樣で……」

「モウそろ〳〵下火の樣です、いゝ鹽梅に風がありませんで、モウ大丈夫です…」

「グッスリ寐込ましたから。アレ……又火の子が……」心配さふに眉顰める番頭。嬉しさふに一調子張上て小僧は「ヤッ……又焔へらア」

「大丈夫です……モウ下火デス」呑込顔の火事博士は知人もなきに蠟燭一丁を使ひ捨てたる勉强家と聞く。

「火元は何處デスナア…」是はゴム靴の掛ある男、官員錄に載りさふな人物。

「元町の裏店でランプださふです」見て來た樣な嘘、身元を洗つたら講釋師かも知れない。

「へエらんぷ……險呑ですナア」感心して聞けば圖に乘る男、一際誠らしく「夫婦喧嘩してランプを蹴たんダサウデス」。

「危ない〳〵……」籠長持を運ぶ韋駄天走り。突飛されて「アレ……ひどい」と號ぶ女、一ト口に「間抜ッ……」と罵らる。警察官の盡力に右左と道を開けど、前側の一人轉げ掛れば一となだれに一同よろ〳〵。

此雜踏の中に十四五の娘、寐卷姿に垢染たメレンスの帶をしめて覺束なげに立つたるはヨモヤ物好にはあらざるべし。見れば心配さふな眼に憂愁の色を顯はし往來の人を一々ながめるも氣のない顏つき。燒出されか——恨めしげに火を見る眼。茶番狂言と云ふ身振で逃出す人を見ても關係なき心には面白かるべきに——杞の國の生れならねば。

群集の中から逃出す老若男女。丸裸に半天一枚右に三味線左に枕を持つは新内語か。釜蓋に擂木を持てキョロ〳〵する賤婢、薪割を肩に心張を杖く門番の親爺、平日ならばいづれ噴飯を誘はざるものなし。

跡から來るは襤褸の上に半天を着たる三十五六の女、六七十とも見ゆる老婆を背負ふて息も絶々。以前の娘は目早く「お母さん‥‥」一際聲を張上て「お母さん‥‥」老婆を背負ふ女はあたりをキヨロ／＼。忽ち嬉しさが顏に現はれる。

「お‥‥お時‥‥かエ」

是丈が精一杯、跡は絶々の息ばかり。

「アノお父ッアンは‥‥」、常は常でも斯る時に案じらるゝはサスがに子の情。「お父ッアンは‥‥」

「お‥‥お父‥‥」 母の返事は耳を澄せば聞ゆる動氣。警察官は聲高く「立て居チヤアいかん‥‥邪魔になるぞ」再び調子を高めて雷の樣「コラア退んか‥‥ぶつ拂ふぞ」劍を拔かぬ計り。凍つた雪に照りつける日、見る間に人なだれ、母子はいつか押されて狹き小路、積重ねた疊の影にホツト息。背負ふたる老婆を下せば――とは如何に身躰はグタリ、倒れかゝるを娘は押へて「お祖母さん‥‥シツカリなさいよ」。母は吃驚、靜まりかゝりた動氣が遽に速度を益せば錯亂したる精神は愈々顚倒する。老婆の耳に口、一生懸命に、

「お母さん‥‥」

娘はとつをいつ「お祖母さん‥‥」はや涙聲。無殘、身躰は既に‥‥氷。母も娘も顏見合せた計り‥‥諸共に無言。娘は堪りかねて再び「お祖母さん‥‥」。母は矢張‥‥無言。

貧乏人の氣安さは運出す品物もなく、身躰ばかりとお須摩は母をせき立つたが、醉伏したる我が夫「あなた‥‥」と云ひながら手を取て引ずれば母も傍から「作次‥‥火事‥‥ダヨ」と心配顏。鐵砲の響に醉の醒めたる五斗兵衛ならねど半鐘の音に何思出しけん作次はムツクと起て戶を蹴離して表へバタ／＼。「アレ作次‥‥」と我れしらず母は弱足踏しめて駈出す途端、朽れた板を踏落して土間へバタリ、ヒイツと號ぶ聲、「お須摩は飛出す時最早火の子は雨の降る樣、隣の家婦さんに「お須摩さん火がついたよ」と曰はれて夢中に倒れた母を背負て命から／＼爰まで。

傷はしや、今考ふれば打處の惡かりしか、あまりと云へば敢果なき最期、今少し早くば‥‥ト唯無言。

娘も火事は我家の近くと聞て暇貰ふて來りしに、祖母の亡骸を見んとは思ひきや。云ふべき言葉もなく打濕る袖。

眼を凹くして呆れるは積重ねた疊の上の張番、是も無言。

寄書

〇法律上結婚者の年齢に付て　　秋洲健次郎

結婚者の年齢に定限を設くるは各國の法律皆一にして其年齢にこそ差異あれ年齢を問はずとするものはあらじ其理由は今更ら事々しく云ふまでもなけれ共其大要を摘めば一生理上年齢を限らざるべからず若し之が定限なければ壯年血氣の男女は一時の痴情の爲に婚姻し身躰有形上の發達充分ならざるが爲双方の身躰のみならず此間に生ずる子女の身躰までを薄弱にすれば也。
二風俗上年齢を限らざるべからず壯年痴情の爲め或は充分の思量なく結婚するが故に其結托するや眞の婚姻即正當愛戀の婚姻ならざる爲に一二年を經過せば風波此間に起り夫婦の琴瑟を破るの恐あれば也。
三國家經濟上年齢を限らざるべからず壯年の男女相結婚せば夫は身を立つる能はず婦は調理の法を知らず無爲に日月を送り碌々其生を過し子女生ずるも養育するの資なく夫婦は子女を抱て父母に資料を仰かざるを得ず今日の實況貧家の子女は漸く一家を爲し得るも富家の子女却て獨立自食する能はざるものは貧人は早く婚嫁する能はずして富者は早婚するが故のみ。
予は以上の三理由に依て結婚者の年齢を限るの法理に適合するを信ず然れ共予は人生繁殖を恐れて早婚を禁ずべしとは云はず限りあるの土地限りなきの人生を出さば食するに地なきの患あるべきは一理ある如きも之れ畢竟杞憂に過ぎず予は「ケリー」氏と共に之を憂へざるなり人民増殖を恐れ結婚に年齢を限り以て婚姻年限を短縮せんとするは正理に戻る婚姻より子女を生ずるは天理自然の結果にして子女の生ずるを恐れて婚姻を爲さゞるは婚姻の眞理を知らざる者也故に予は年齢に制限を設くるの必要を説くも此の如き理由は擯斥して取らざる也。
予は既に我所思を述べたり然らば茲に筆を擱かんか只一の擱く能はざる者あり他にあらず我國に奇を好むの學者おはして奇説を唱へられたればなり故に一言の辯を試み益我説を固めんとす予は學士に打勝得たりとて手柄顔せんとするにあらず世間學士を妄信するのあまり此奇説に迷はさるゝものあるを恐るゝ老婆心のみ。
好事學士奇説を述て曰く婚姻には年齢を限るべからず婚姻は人の身分上の關係にして之に制限を設くるは人身上に束縛を加ふるものなり人の身體は決して法律を以て束縛すべからず今之が制限を設けざるも身體の發達せざるに結婚するものなかるべく又父母も之を許すまじよし幼者結婚して生理上害ありとするも之身體を束縛すべからずとす自然の結果なれば如何ともすべからずと。
噫予の目するに奇説を以てするもの果して非乎結婚の年齢に定限を加ふるは束縛は束縛なり然れ共之皆痛を與ふるの束縛に非ずして其者を保護するの束縛なり生理上害あるも自己の身躰なれば勝手なりと云ふは夫の所謂吾人の身躰なれば自殺するも勝手なりと云ふ粗暴論と何ぞ撰ばんや吾人は吾人の身躰を健康に保つの義務あり元より自然の義務にして法律上の義務に非ずと雖も其者を保護せんが爲に法律上其義務を盡さしむるは決して戻理のものにあらず又論者は生理上の一點より觀察を下し其他の點より窺はずと雖も今婚姻者外に立て之を觀るも社會の風俗を紊し社會の滅亡を招くが故に社會保全の爲に之を束縛するは何の不可か之あらん其發達せざれば結婚せまじとの論旨は君子國に於て論せば價値もあらん今日普通人民には到底望なきの希図に過ぎず父母の許諾を與へざるを頼むは薄弱の制限と云ふ可し。
夫れ普通の契約と雖も幼者は無能力者として之を無効とするにあらずや況んや婚姻をや予は婚姻は契約なりと云はず然れ共双方の承諾を要するを信ず幼者豈に此一大身分の關係を作るの能力あらんや之予の結婚年齢に定限を設くるの法理に適し好事學士の奇説を駁する所以なり。
我邦民法未だ成らず結婚の條件未だ明かならず從て其年齢に制限なきを以て早婚の弊害眞に云ふべからざるものあり乞ふ世間の青年男女諸君之が利害得失を考へ成法なきも我心を以て法となし少く鑑みる所あれば豈に唯々諸君の利のみと云はんや。

〇政府より功勞を表彰するに盃を用ふるを廢しては如何　　近眼法士

日本今日現存する事々物々古來習慣によりて行はれなるもの夥多あり然れども亦其無用不理由等の字を冠らする物も少なからず政府より學校寄附金土木工事へ關する民人の盡力其他の事項により金銀木等の等差ある盃を其本人に下賜し名譽を表彰し居れり此事は余亦冠するに無用の二字を以てすべし故に此等は廢する方宜しかるべし何となれば殊さらに金銀等を以て盃に製造し下賜するに限るまじ其名譽を表彰する方法は賞状あり勲章あり又其他の方案なきにあらず成程中には盃は飲酒の時の必要品にして婚姻に葬式後に知己集會等に伴ふものなればまして名譽を表彰する盃の如きは實に貴むべきなりと此等の人は兒戯に同しき心を抱き居る事故不問に付して可なり而して余の聞く所に依れば多くは本人は大低何の用にもならず仕方なしと云ひ居れり且方今惡風の事項に喋々云ふもの實に多し況んや近來地方ユ禁酒會等起りて禁酒の効用を主張せらるゝに於てをや余は只に己れ飲酒せざるの故を以て前言を爲すにあらず只社會の進歩上百事を生産的に使用したきの餘政府より下賜の盃に及べり政府若し之を廢して恐くは困ると云ふ者なかるべし云はば無効無用の者果して何をか爲さん此事瑣細なる様なれども左にあらす古語に曰く上の好む所下之に倣ふとか旨ある此の言を味ふべし。

在小石川　山本榮子

貴社雜誌第百五拾七號掲載せし寄書欄内の部に道德法律關係疑問と題し五個の事實を掲載せられたり妾不肖にして之か能く法律道德の何たるを識別せすと雖も暫らく妾の胸裡の感想せし所意を陳述し先進者賢姉の裁斷と明教を請はんとす雜誌貴社幸ひに採用する所あるありて一片の餘白を貸んや否。

第壹問答案原文を略す

妾偶々本問を熟考するに之が疑點の存する處は甲其者の行爲が道德上に對し責任ありや否やと云ふにあり然り而して妾は甲其者の行爲は道德上の制裁なきものと信認せり其果して制裁なきものとせは又た何んの責任も生せさるものと斷案するに敢て躊躇するならん乞ふ先つ甲者の所爲を推論し以て逐次道德の何者たるか略說して本問の局を結へんとす。

抑も甲乙の兩人の旅行せしや旅次相互ひに此の天變の事實ありとは豫期せさりしならん然るに旅次黑雲天に漲り大雷氣中に鳴轟し吾人の耳聽機をして殆と其作用を失せしむるに至らしめたる而已ならす降て吾人は身心恂々其雷鳴々恐怖せさるはなし由し之れありとするも十中の一部に過きす概して之を言へは其恐怖するは吾人の普通にして之か驚愕せさる者は稀有の不敵者と云はん而已之れ其一部を以て萬倒する能はさるものとす依之妾の察る所に據れは甲乙の兩人は發ま此の偶然の天變に由り充分の恐懼心を抱き以て身心の危難を避けんとし爲めに一つの堂宇を見認り互ひに爭魁せしも幸幸ならすして堂宇二人を守掩するに所なく遂に甲をして此の結果即ち乙を堂外に突き出たさしむるの行爲を現出するに至りたるものとす。

夫れ如此んは甲乙共に畏懼心充滿し躬自ら之を制する能はす已に其制する能はさるに至れは人心も精神も亦た既に喪失し前後識別なき而已ならす自他を省みるに暇なきものにして甲の行爲は甲其者の行爲と云はんよりは寧ろ天爲と云ふの勝されりとす而して甲其者の行爲已に天爲なりと論定するを得ば乙の雷擊配に至りたるも天爲なり然れは即ち乙が死せるや天命と云ふも不可なきのみ上來甲の行爲は已に論下したるが如くなれは今將さに進て道德の何者たるを論及すへし。

夫れ道德の何者たるやを平易に解するときは自他各人の眞心の交際にして社會一般の消極的義務なりと云ふも敢て大過なかるへしと信す然り而して道德なるものは神爲實理感情道德の三種に過きさるものにして吾人は多くは此感情道德說を採用する所なれとも已に本問に對し甲其者の行爲は天爲なりと論定するを得たれは今更道德を必辨論啟するも故ら贅說に涉すれは茲に言はす乞ふ讀者諸子の御明考あらんとを然りと雖も自己の行爲を以て「有意無意共に適用他人に損害を加ふへからすとの格言あるは或は吾姉諸子には甲其者の行爲は道德の責任ありと駁論を試みらるゝ諸子あらん乎左はあれ此の格言たるや自己の過失及ひ故意を包含して云ふものなるとは瞭々乎として又た疑ふべくもあらされとも本問已に天爲なりと假認したれは甲其者の行爲は自己の權利を必要に由て即ち正當に執行したるものにして他亦た何人と雖とも自己の危險を於て他を保護せさるへからさると云の義務なし義務なければ制裁なきと奚んろ擇ばん。依之觀之甲其者の行爲は過失なり故意なり吾人の得て神聖に非さる以上は前知すへからさる天災に際し自己の厄難を避けんか爲め不得已必要上より甲其者は正當權を執行せし者に付道德上制裁なきものと決論する所以なり。

春　月　　　　　郡の山人湯谷磋一郎

うす絹を顏にかけたるわきもこか偸見する朧夜の月

我まとの花の梢もおぼろにて靜に匂ふ夕月のかけ

花

家つとにけふは折てん櫻花かへる山路に風の吹かねへ

嵐山の花を詠て

大井川花もかくれる柵ゐなかるゝ春をせくよしもかな

流てはかへらぬ水の心とも志らてや花のうつり初けん

同し時日頃の雨ゐて渡月橋の落たるを見て

春雨にはしへ流れて大井川波にたゝよふ月のかけ哉

大和にものしける時の歌のうち玉河ゐて

結ふへき水さへ涸て古の名のみ流るゝ井手の玉河

笠置山に登りて

降雨に半へぬれて笠置山松風寒く日へくれにけり

朝　燕　　　　　案山子の屋の社中磯貝由太郎

朝つく日匂ふすたれにかげ見えて古巣たつぬるつばくらめ哉

春のうたの中に

春雨に野澤の水やまさりけんつ花つむ子か袖ぬらしつゝ

朝　雲雀

青柳のかつらき山の淺みとり霞む朝日にひはりなく也

草庵春雨

行かりの聲を聞くたに悲しきを草の庵に春雨そふる

朧夜春雨

あしひきの遠山本の夕月夜霞むと見れは春雨そふる

朧夜　蛙

山吹の花もちりゆく玉川のおぼろ月夜に蛙なく也

水邊山吹

世の中のちりへなかれぬ山川にうつるも淸し山吹の花

松　上　藤

藤の花みさほかはらぬ松か枝にかゝるや高き心なるらん

暮　春

ちり殘る花をたつぬる鶯の聲をかきりの春のくれ哉

小雨ふる草の庵の夕くれに春のわかれを惜みつる哉

正誤

前號附錄欄内下田歌女史の祝詞中御國の母とあるは御國の母の誤りに付き茲に校正の踈漏を謝す。

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

寄書

○同志社大學寄附慈善音樂會の不經濟と題する投書に答ふる發起人の主意書併せて作直之助君の厚意を謝す

右發起人　幷會主　佐々城豐壽白

上略別書は前週經濟雜誌にも答へたる主意の大略に候者なるが再び女學雜誌第百六拾貳號にも投寄せられたれば小妹も尙又此答書を貴社紙上にも御掲載下され成へく多くの姉妹方にも知らせ申度希望致し候

今より三四週間程前の經濟雜誌にO.S.C.と匿名を記し音樂會の不經濟と題して痛く批難せられたり、小妹は此忠告を敬んで默聽し一切答辨せず世の男子諸君の言路を洞開し置かんと思へども其誤りに誤解せる甚だしき部分は答辨せざるを得ず殊にO.S.C.と匿名のみ故に答辨中には語氣或は敬禮を缺きしやを悔ゆ今又同一文字の批難を掲げて成たけ多くの婦人に見せ度との志意にて作直之助君より廣告せられたり已に此事は經濟雜誌に答辨せば茲に未練らしく再言するを欲せざれ共同君の厚意に背くを恐れ再び答辨して小妹も亦此事を成たけ多くの女流に見せ度姉妹の一覽を賜はりて現今日本の婦人は如何なる境遇に在るや如何なる方向を取るへきや如何なる世の輕蔑を受るやを考察して假令不經濟なり共又は損失を成すとも世には成すへきの義務と成さねば成らぬ必要の事共に有もの也故は之が爲には金錢の不經濟のみならず所謂一身或は一代の名譽までも犧牲に供すると言ふ事すら存するに非らずや金錢の不經濟のみならず百年の名譽も一國公衆の爲めには顧みざる機會あるに非ずや經濟學者の取らざる所なるやは知らされども世間の繁き世事の多端なる劃一一定の經濟上より勘定づくに計り行くものならず妙なれども決して算盤勘定には萬事萬端ゆく者には非ざる也又假令直接に損毛を招くも永遠の利源を開らく事もあり又今日今後とて別に利益づくには登らざるも成さねば成らぬ事も有もの也世の姉妹方よ深く考察せよ現今日本の事物に對しては直接に名譽の損害を受るも直接に不經濟に歸するも成さねば成らぬ事ども多きに非ずや今此に妹が批難を受けたるに畏縮して益々引籠み思案に陷ひる勿れ凡り社會に立ちて善行を爲さんとするにはされ相應の反對もあるべく亦それ相應の失敗もあるべし唯その大體より觀察を下たして國家永遠の爲め善事と考察せば一世の毀貶を顧りみずして衆人の抗抵に屈撓せずして善を成すに猶豫する勿るべし小妹は思ふ善を成して恐るゝ勿れ善を成して惡に勝てとの精神に富まれんとを、今此答辨は經濟雜誌に寄せたるをそのまゝ

O.S.C.君に答ふ

「同志社寄附慈善音樂會の不經濟」と題せる一編の論文を掲げ吾儕の措置方便の蕪拙劣なりしを痛論せられたり吾儕は其丁寧なる訓戒を拜讀して御厚意の段は深く感謝し奉つるが是只外形上の決算報告を一覽せし人にして全く内情を毫も知らざる御方と存ずれば一言誤解の廉々を申述ぶべし。

一貴君は實券料の純益は雜費を差引僅かに三十圓余に過ぎずもし寄附金ならば前述の收入とし全收入三分の二を無益なる雜費即ち不生産的の消費に充てりと申されたり是は只其表面をのみ判斷なされて實際の事を少しも御存なく因て此の如き誤りの判斷を成されたりと存じ候。

一又百圓位の寄附金を得るに斯の如く時日と心配と勞力を費し大層らしくせずとも容易に得らるべき如くに仰せられたり實に左樣なる方法あらば結構の事に存候所謂勞せずして實益を得るものにして濡手で粟を摑むの妙案也只此事の紙上の御話のみに留りて方法を示されざるを遺憾とす。

一貴君に限らず世には能く慈善會の性質を知られたる人々の言はるゝには如此會は一錢でも拂ふに及はず須く會の性質にて收入して差支へなく飽まで出金させよ飽までも拂ふに及ばずとの御話しも充分に承知し居り候然れども日本現今の事情と會主其の者の關係を知らざる單純表面理論家の說なり如何にも彼の慈善會の如く會主其人は樞要の地位に坐して命令的に聽衆を集め義務的に入場券を負擔せしむる如く新聞雜誌の廣告は總く無料又會場も印刷も無料又東西に奔走する人も皆能く其義務を果さば實に妙にして眞に慈善會の名に恥じざるの譽と云ふべし吾儕も之を欲せざるに非ず然れども吾儕の交際の狹き地位の低き名望の固より有らざるとても義務的命令的の如きは夢にも及ばず又奔走の充分ならざるも婦人僅少の人員の爲せし所なれば盡く東上の奔走に由らざるなし。（未完）

時事

○皇后陛下御仁德

皇后陛下は、今回東京慈惠醫院の狹隘にして未だ廣く慈惠を施こし難き爲め、僻地なる避病院を他に移轉せしめて之を擴張せんとの計畫あるを聞し食れ、大に御用度の御省畧を仰せ下され、廿一年度に於て衣服其他御物御雜具類にて定額の中より若干を節させられ、一は慈惠醫院をして倍々廣く慈惠を施し一は速かに避病院を市外に移轉し人民の煩を除かしめんとの仁慈の思召にて、左の如金員下賜の恩命を下されたりと

承れる、

今般其院の區域を廣めんが爲め隣地避病院を移轉せしむる趣 皇后陛下被聞食客年度中御服其他諸費御節縮被遊候殘餘金八千四百四十六圓九十錢八厘 思召を以て右移轉費として其院へ下賜候旨御沙汰候此段及御達候也

明治二十二年五月廿三日 皇后宮大夫子爵香川敬三

慈惠醫院長高木兼寛殿

御仁慈の思召し有難き限りにして、之を拜聞して、吾等臣民は感痛の涙に禁ずるあたはず。

○慈惠醫院行啓

去廿九日慈惠醫院總會には 皇后陛下行啓あり、御前に於て看護婦卒業生庄田とよ、篠岡とよ、淸水のぶ、島きん、の四子に卒業證書を下賜せられ、特に松岡さと女を召し出して其の看護婦養成に盡力淺からざる旨を御感あり、院長高木兼寛氏は同院第二報告を奉呈し、且つ其の一般を申告さる、其の大略に曰く、

當明治二十一年度中

施療患者 四千六百九十一人 内施療日數七萬八千二百廿九日前年度より人員增五百五十八人 日數增八千四百三十六日 一日受療人平均數二百十四人

内譯

入院患者三百九十八人 { 全治 百六十人 / 輕快 百〇七人 / 死亡 七十三人 / 未癒 五十八人 }

右施療日數 一萬九千二百八十七日

外來患者四千二百九十三人 { 全治 千百三十二人 / 輕快 六百二十四人 / 死亡 三十五人 / 未癒 二百三十七人 }

右施療日數 五萬八千九百四十二日

去明治十五年創立以來廿二年三月迄

施療患者合計 一萬六千七百六十七人

施療日數合計 三十八萬九千六百十三日

右の如き多數なる慈惠の施し得られたるものは、抑そも該院當路の役員諸君の盡力非常なるに因りとは云へども、其主因たる實に陛下の仁德優渥なる所ろ、慈善の御感化圓滿せるが故にあり、重ね〳〵有難き御事なり。

○御誕辰祝日

去廿八日 皇后陛下御誕辰に當り、府下の主なる女學校即ち華族女學校、高等女學校、櫻井女學校、明治女學校、成立學舍女子部、跡見女學校、女子職業學校等を初めとして、其他幾多の女學校は大抵學業を休みて祝式を催し、女學に關係ある會社は國旗を掲表し、基督敎信徒の婦人特に婦人矯風會の面々は數寄屋橋會堂に集まりて感謝會を開きたり。

○近時最大の墓表

靜岡の良二千石關口隆吉君卒す、遺書の文に曰く、

(前略)其れ葬祭の如きは質素たらむことを希ふあり近時競ふて葬事を裝飾するの流行は余が甚だ喜ばざる所なれば後の余が喪主たるもの宜しく心を用ふべし余が死後葬事一切の費用は金二百圓を以て其の極と定む若し二百圓の金は兎も角も貧にして金なければ東海の魚腹に葬むるも憾みとなさず却つて余が本意とする處なり呉々浮華の流行に從ひ立派なる葬式をなすなかれ

月　日　　　　關口隆吉　申置

花押

墓石棹石高さ二尺八寸　巾一尺五分　臺石二重

右書上封の表に一首の歌あり

世の中は浦嶋が子の箱なれや
わけてくやしき夏のみじか夜

嗚呼鐵舟僊け、一翁失せ、此人亦逝く、海舟先生願くは自愛せよ。昔し此流の與士ありつれども、大厦の倒れんとするや復た支ゆ可らざりし、左らば今の考るもの豈に獨り久しきを得べけんや。

○貴族的、壯士的

時事新報は、故關口隆吉氏の遺書に據りて破格の社說一篇を歌ひ出せり、其の末文に云く、

以上は關口氏の遺書に付て聊か平生の所思を陳べたるものなれども本來儉約なるものは啻に箇の爲にて効能あるのみならず又人心の浮華を防ぐに足るのみならず別に人生の運動上に於て頗る勢力を添ふるものゝ如しと云ふに外ならず今の政治社會に於て年少氣鋭の壯士輩は常に活潑なる運動をなして到る處勢力を逞ふし社會の表面に生氣を添ふるの趣なりと雖も彼れ壯士輩は概古今を兼ね該東西に亘るものなりやと云ふに未だ必ずしも然るに非ず道德高くして身の品行は以て世の模範すべきものなるやと云ふに是亦必ずしも然らず或は多士の中には拔群の俊英なきに非ざるべしと雖も之を概するに壯士は智識の源なりと云ふ可らず智德財産の實力なくして而して能く社會に勢力を占むるは何ぞや我輩を以て之を見るに是は唯儉約なるが故にして襤褸を恥ぢず粗食を嫌はず衣食住の事に付ては一切甚だ淡泊にして山を越え水を渉るに必ずしも舟車を要せず雨笠を友として草鞋千里を辭するの色なく運動都て輕快にして東北に同志を求め九州に會に赴き身裝に頓着せずして貴顯紳縉の前にも縱橫談論するが故に其形跡は活潑にして他を排して自ら頭角を現はすものなるべし之に反し美服に非ざれば紳坐の前に出することを能はず嚢中錢なければ旅行も思はしからずとして徒に贅澤なる詐文を並べ金を欲して金を得ざるより躊躇逡巡空しく不平を唱ふる者に至ては其運動や憶病ならざらんと欲するも得可らず社會の隘所に齷齪して壯士に壓倒せらるゝも亦宜なりと云ふべし。

痛切、爽快の言なる哉、時弊の極まる所ろ、拜金宗先生も未だ此の如く論ぜざるを得ざるに至る、黄金に眠るの殿樣方、請ふ少しく眼を開けよ。

○賄賂橋上の杜鵑

東京府會賄賂事件に關し、其社員社友が尤も深く嫌疑せらるゝによりて不得止先右事件調査の端緒を公にしたる、彼の論說記事の平素公正嚴格なるを以て信用ある毎日新聞は云く、

抑々彼の賄賂事件は實際ありしとなるや否や曰く余輩の聞く所に依るに其賄賂は未だ出金者の手より出でたるにあらざれども報酬金として出すべき金額は略

ば一定したりと然らば何人が此賄賂贈與の紹介者たりし歟曰く余輩は其人名を明示することは賄賂事件調査委員に一任すると至當なりと思考せり之を本紙に明記することは余輩の欲せざる所なれども之れが取扱を擔任せんとしたる人は府會議員としても他の部面に於ても相應に名を世に知られたる人たることを明言し置くべし然らば彼は如何なる事柄を取り扱ふたるやと云ふに去年十月頃のことなり芳原梅毒檢査所の開場式ありたり此時府會議員の中にても招に應じて往きたる人隨分ありし由なるが此等の人々の中某は私かに別室に入り貸座敷營業者の重もなる者及び當時或る所に奉職したる某等(今は非職となり居ると聞けり)別に小會を爲したるに營業者は賦金の苛酷なるを訴へ此稅の府會にて輕減せられんとを望みたり議員某は平生其邊の所に拔け目なき人なれば營業者の希望遂し難きにあらず然れども之を爲さんとせば差し當り宴會費に若干圓許外に報酬として五六千圓なかるべからず此邊の所は異議なき歟と云ふ營業者は若し此賦金にして廢止となる者ならば六千圓が六萬圓となるも重き負擔にあらずと思ひしなるべし直ちに議員某氏の申出を承諾し抑の程何條異議の御座あるべき芳原洲崎を始め品川千住板橋の同業ヘ計り出金せば容易の事と存候と評議纏ば此に調ひ後數日にして此六千圓負擔の割付を爲さんとする時郡部の人某氏之を聞き郡内なる各貸座敷營業の者に說諭して曰く汝等賦金廢止に就き之れに屬する六千圓の負擔を分任せんとするは如何にも迂闊なり汝等斯る費用を分擔せずとも區部に屬する遊廓にして賦金廢止とならば郡部の遊廓は一言一語を煩はさゞるも自然に賦金廢止となる者なり斯る無益の費用を拂ふよりは他の有益に費すべき事業少からずと云云と說諭したるより郡部貸座敷營業者は頓に其分擔を辭することとなり之れよりして彼等同業の中に紛議を生じ未だ實際出金せざる前(宴會費若干圓は既に出金したるや否やは知らず)此問題早く世間に顯しくなりたるなりと。

賀すべし、賄賂事件調査の結末將に明白に近づかんす。

○女子會吏の創始

府下一番町一致教會に於ては、此度女子會吏を撰擧して男子會吏と同樣に會務に盡力せしむることに議決し、呉くみ夫人は長老に、高原みね夫人は執事に擧げられたり。組合教會及び其他に於て從來女執事と云へるものはありしが、長老として女性の撰擧せられたるは蓋し之を創始と爲す。

雜 報

○一夫一婦建白書　當今其同盟評判中の由なるが、加藤弘之氏の夫人、中島信行氏夫人、植木枝盛氏、及鈴木舍治等はすでに第一番に加入したり。

○明治女學校文學會　去廿四日同會の小會を開かる、會員の演說文章朗讀批評諧謔等ありしのち、女子小說を讀むの可否に付て討論あり、終りて來賓德富猪一郎氏はビクトルユーゴの小說に付て、加藤弘之氏は當今女學生の心得に付て演說ありし由。

○植木枝盛君　同君此度上京に付過廿三日婦人矯風會員之を招待して一夫一婦建白の事及び倫理大躰の理に付て演說を請ひ、聽衆堂に滿ち、二時間餘の有益なる演說ありき。

○京都婦人慈善會　同會は過日京都盲啞院に於て例月會を開き赤松連城師及び醫學士足立鍵三郎氏等の演說ありたり當日の來會者は尾越書記官、清水衛生課長、安藤精軒等の諸氏を始じめ五十餘名なりし。

○養蠶法の傳習　鶴川端御幸橋上る京都製糸會社にては今度上州前橋の久野鎭夫氏を聘し社内に養蠶傳習部を設け製糸傳習の工女に併せて養蠶法を敎授することの事。

○戸部宮女學校　は磯島せつ子太田こと子の創立せしものにして去る二月中假に開校し來りたるが漸く諸事の整頓せしを以て去る十八日同校に緣故ある人々を招待して開校式を擧行せられたり因に記す同校教授はミス、エーダ主任となりツルー、デピットソン兩夫人が每月二回東京より出張して教授を助けらるゝ由。

外 報

○歐洲近事　和蘭に於ては女子を學務委員に撰擧するの可否大ひに論ぜらる、而して政府は寧ろ否說に傾きたり。スエーデンにては女子を學務委員慈善委員とすることにつき下院にては八十に對する九十九、上院に於ては五十七に對する五十九の多數にて可決したり。近日日耳曼アウグスバーグにて開く獨乙敎員同盟會第二十八回に於ては、女子教育の現況及び壯年女子教育の必要並ヱ其の目的教科書に付き主として討論の筈。獨乙女子改良組合(Deutsch Frauenverein Reform)はプロシア、ババリア、ウルテムブルグ等の文部大臣に願書を呈出し女子を大學に入校せしむることの許可を請へり、抑も此の組合は日耳曼、アウストリア、スウイツルランド等の女子及びロシヤ並に英門に居る日耳曼の女子等より成れる會合にして去年三月ワイマルのケットラー夫人が創設せしものなり。

○ビートリス內親王の分娩　英國女皇の第三女にしてバツテンブルグのアレキサンドルの第三子ハインリツヒ公の御息所なるビートリス內親王は男子を分娩せり。

○英國上院の議決　先妻の姉妹と結婚する事ヱ關する議案は上院の第二討會に於て二十七の多數に由り又々否決したり。

女學雜誌代金滯候御方

にして毎々御催促申上候得共尙ほ御拂込無之仁あり而も其御住所すら分明ならざる向も候まゝ如此き御方ニ限り以後雜誌上に於て御催促申上候に付不惡御承知被下度候但し本社は專ら情義を重んじ候心得に有之決して輕々しく右樣の取計らひ不仕存候得共何分三四ヶ月以上も滯り居り候上每々の御催促に一報をも寄せられざる諸君に對してハ實以て不得止の處置と御許容あり度預め申上置候也

●滯金催促

大和國五條新町聖三一公會　**荒木政利**

秋田縣雄勝郡岩崎町　**石川伊豫**

京都府今出川寺町西へ入二丁目五番地　**澤集光堂**

右は本誌代金滯り居候に付數回御催促申上候得共今日に至る迄御送金無之如何にも**不信切無頓着**の至りと存し候に付き更らに本誌廣告欄內に於て及御督促候也

明治二十二年五月　女學雜誌社會計掛

小說雜誌 **文庫**　一冊金七錢●十二冊金七十二錢　●郵送料一冊に付き二錢

やまと昭君(紅葉山人)○花盜人(思案外史)○黄菊白菊(眉山人)積雪節松枝(漣山人)○鏡裏花(春)合作小說猿虎蛇(漣山人)○可愛い子(思案外史)○批評一節

本號より社中總がゝりの合作小說を揭載す其面白味は御一覽の上御評判を乞ふ

東京神田區乘物町　**吉岡書籍店**

●同志社寄附金第二回

五月廿九日迄

一金二十錢　京橋區南傳馬町二丁目　落合よし

交詢案內

(催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ)

●雇ひたき方(甲)

- 十二 下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
- 十五 召使　家內の手助けとなり小兒の世話をすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む
- 十六 召使　重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり
- 十七 下婢　二十歲前後の薪水の勞を取る下婢を雇ひたし商家にて家族五人仕事はひまなり月給は一圓以上
- 十八 下婢　年齡廿四五歲にて裁縫讀書數學習字等を閑暇の節は教授致すに付き無給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會に行くも家內同樣にすべし
- 二〇 取締　基督教信徒にて年齡三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校ニ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者

●雇はれたき方(乙)

- 六 奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇ハれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
- 七 裁縫　年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
- 十三 教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む
- 一九 召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇はれたし
- 二〇 裁縫　年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之內ニ小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受
- 二四 奉公　年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
- 二五 裁縫　裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし
- 二八 奉公　普通小學科卒業の者にて(年齡二十二才)產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に產婆術を學び度ものあり
- 二九 奉公　年齡十四歲にて基督教信徒の家(可成は西洋人)に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き每日四五時間英語學の修業致したし
- 三〇 通辨　年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨さして雇はれ度ものあり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

●改良速記法 自宅獨修生募集 無學費一ヶ月卅錢 東脩

郵券二錢を投せば規則速呈●別に速成科を設く

東京本郷元町一丁目三番地 私立 大東速記學協會

本日午后一時より四谷門外華族女學校にて例會相開き候間會員諸君は勿論會員外の婦人方も御來聽あらんことを希望す尙ほ當日の講師演題は左の如し

石黒忠悳君 （婦人の衣服に就いて）

宇川盛三郎君 演題（衞生及自治躰）

中濱東一郎君 （婦人の美）

京橋區日吉町八番地 私立 大日本婦人衞生會

經濟及統計

本誌ハ經濟及統計ノ學理ト應用トヲ研究シ併セテ其普及ヲ謀ルモノナリ 五月十五日發兌第五號目錄

毎月一回十五日發兌 一冊金八錢郵税一錢

論說 東西計民法通考（前號ノ續）…… 高橋二郎

同 衞生的統計證明ノ必要ヲ論ズ…… 吳文聰

同 支那古今戸口考…… 横山雅男

講義 人口統計論…… （承前）

同 國民經濟學…… （承前）

翻譯 都府ト田舍…… （前號ノ續）

同 理論經濟學…… （接前）

統計 統計或問…… （第三回） 高橋二郎

表 東京市會議員撰擧被撰擧權所有人員及納税額表

同 佛國結婚者年齡表…… 麻峰仙史

寄書 世界各地產出貴金屬量目表…… 石巖道人

同 獨乙ニ於ケル男女人口ノ比較…… 茨木生

同 米國經濟學進步ノ概畧…… 墨山樵叟

雜報 佛國百年以來ノ大藏大臣●佛國々會ノ費用●米國々會ノ役員●明治十七年度歲計決算●文部省所轄學校●府縣會議員ノ族籍別等●金ノ魚虎●各國人口ノ倍期●參考各國古今經濟學理論書目其他數十件

發行所 東京麴町四丁目十三番地 經濟統計社

發兌					
六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價				
一册。	六錢	郵税。一錢	（但府內無郵税）	
十册。	五十八錢	郵税。十錢	（同前）	
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓六十九錢	
一年分	二圓六十錢	府外は	三圓十二錢	

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰） 一回 前金拾錢

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年五月三十日印刷

明治二十二年六月一日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"Jogaku Zasshi."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8b Hiyoshichō, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY